



カンボディアの経済と社会

高山, 敏弘

(Citation)

カンボディア学術調査報告, 1:40-80

(Issue Date)

1958-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006892>



カンボディアの経済と社会

高山 敏 弘

まえがき

私共は、1957年2月8日タイとの国境を越え、5月9日ブノンベン埠頭から船上の人となりメコン河を下るまでの丁度3ヶ月間に亘るカンボディア調査旅行に従事した。

このさやかな報告は、その間にカンボディア各地を廻つて資料を蒐集しながら直接見聞したことや考えたことなどを基礎として、帰国後の諸資料を参照しながらとりまとめた簡単な予備報告である。

あらゆる困難と障害に遭遇しながらこの計画立案を実行に移された当局、並に陰に陽に御支援いただいた多くの方々、又現地での御支援と協力を惜しまれなかつた日本大使館及び商社の方々、それにカンボディア当局と一般住民の好意と協力とには、筆舌に尽し難いものがあり、ここに心からなる感謝の念を捧げるものであります。

梗概

タイ・ヴィエトナム・ラオスに囲まれたカンボディア国は、近世以前に於てその勢威をインドシナ半島に大いに昂揚して、遠く中国にまでその名を高からしめた時代もあつたが、度重なる周辺諸国との抗争によつて、或はヴィエトナムに支配され、又はタイの侵略によつて占領されるところとなり、国民の疲弊はつるばかりとなり、国運も衰頹の一路をたどつていた。

当時の社会経済体制はいうまでもなく、国王を頂点とする封建国家であり、村落共同体自給自足の経済体制を基礎としていた。土地即ち既に労働の蓄積された意味に於ける土地を物的基盤として、村民は、村の統一意思により編成秩序づけられた、共同組織を外枠に持つ閉鎖的社会に生存の場を有していたのである。そしていわゆる共同体規制のもとに、水田耕作による食糧生産を第一に、専ら伝統的技術の踏襲により生存の為の農業を続けていたのである。従つて外界との接触も少い多くの村民の消費欲望も限られたものであり、余剰農産物の交換取引も積極的には行われぬ。生活必需品の充足には、既に当時にはカンボディアに移住し²⁾村落外に住居をかまえ、計算打算的な商取引を本領とする華僑の媒介によりわずかにこれが果されていたのである。

これが1863年を転起として、カンボディア国も現代史の道を歩むこととなるのである。即ち19世紀初頭より宗主権をタイに奪われ、戴冠式はバンコックで行う慣例であつたカンボディア王室にも、後継者をめぐつて絶えず権力闘争が行われてきたが、たまたま王位を伯父に奪われたノロドムは、当時本国外に植民地獲得競争に狂奔していた西欧諸国の中でフランスの力をかりて王位の回復をはかり、これと1863年に保護条約を結んだのである。タイに奪われていた宗主権もフランスの圧力下にこれを脱したとはいうものの、ヴィエトナム・ラオスに先立ちフランスの保護権を認めざるを得ないこととなつた。以来今日の独立に及ぶ約90年の間、フランスの植民地としてヴィエトナム・ラオスと共に、世界史的観点から特殊な社会経済的發展を遂げることとなつたのである。

ここに詳しく述べるまでもなく、植民地カンボディア国においても、西欧の近代資本主義経済体制と原住民の遅れた前資本主義経済体制とが接触し、前者が後者を内部包含して資本主義的植民地経済社会を形成してゆくのである。その形成過程には勿論フランス資本が政治的権力

を背景にして原住民の生産体制を掌握し、古い生産様式も次第に変質させてゆくのである。そこでは村民の自給自足の体制はくずされ、商品としての食糧その他の農産物や原料の生産を要請されるのであり、又一方ではフランス本国の製造製品販売市場として次第に商品生産にまきこまれてゆく。そこで両面から吸い上げられた利潤はフランス本国に吸収されて、本国資本の蓄積増大に貢献して資本主義競争力を増加してゆく。これに反して政治権力と資本の面から隷属させられた原住民経済は、未経験の商品生産に加うるに低価格によつて集荷集中せられる作物、主として米と玉蜀黍の強制に、又一方高価な製品の購入により、資本の蓄積はおろか負債の増加貧困の増大を来すこととなる。そこには土地及びその他の生産手段から解放された労働者をも析出してくるのは明かである。プランテーション農業として典型的なモノクルトのゴム園企業でも、政治的権力のバックアップによるコンセッション制度の下に³⁾、フランス資本が多額の投資を行い、これ等析出された廉い豊富な原住民労働力を駆使することにより、莫大な利潤を彼等フランスの企業者に齎すことになる。この利潤も又現地に再投資されるだけではなく、大半は本国に吸引されてしまうのである⁴⁾。

そこでは本国資本の要請による限りなき収奪が続けられることになり、植民地原住民の生活水準の向上はおろか、農民自身による資本の蓄積の可能性は勿論のこと、技術の改善による生産性の増大、或は新しい作物の導入による収益性の増大、製造工場の建設による消費物資生産の可能性すらその余地は全く残されないのである。従つて先祖代々の原始的な生産方法を踏襲するに過ぎない結果となり、国の貧困化に拍車がかかけられ世界の近代化の流れにあつてただと残された後進性停滞の様相を典型的に露呈してくる。

フランスの植民政策の一環とも無関係ではあり得ないが、カンボディア経済社会で見逃すことの出来ないのは華僑の原住民経済支配の事実である。曾つてファーニバルはジャワ社会経済の研究に於て⁵⁾、ピラミッドの最下層を形成する土着民経済と、その頂点を形づくる西欧人経済、その中間に介在する東洋人即ち華僑人経済とが併存していて、これ等三つの経済社会では社会習慣は異り共通意思はないが、この異質的なものが集つて一つの複合社会を形成しているという。この図式的理解はカンボディア社会経済の理解を容易ならしめる一助とはなろう。即ちフランス人は権力を背景に投資と貿易を行い世界市場との直接的な接触を持ち、カンボディア人は原始的農業を営みながらもなお間接的ではあるが世界経済との接触は持つ、その中間にあつて主として国内商業を営み流通機構を握る華僑が媒介的役割を果しているともいえよう。ともかくこの様な意味をも持つ華僑は、彼等独自の同血郷党・郷土意識をもつた共同組織をつくり、カンボディア国の隅々にいたるまで系統的な細胞組織をもつて、直接カンボディア農民に接触を保ち、小売商・卸売商・問屋等は勿論、生産物である籾の集荷業者、仲介人、籾商、精米業者、米商にいたるまで、又玉蜀黍やカボック、こしょう、塩干魚の集荷販売輸送まで一手にひきうけ、他の介在の余地なきまでにその結束をかためていたのであり、現在も又少しもかわるところないのである。直接カンボディア農民を貨幣経済にまきこむのも彼等であつて、そこでは彼等独特の功利打算によつて、無知なる農民の前貸資本所有者でもあり、高利貸的存在でもあつて、あくなき搾取を続けて資本の蓄積をはかり、彼等の組織を益々強固にすることはいうまでもない。これと対蹠的にカンボディア農民の貧困と、析出された都市労働者の貧困とが倍加されることは明らかである。

そこでフランスはこの華僑の勢力を無視することは出来ず、むしろこれを利用しながら最高の利潤をあげんと企図するのである。その政策的変遷はいろいろあげられようが、ともかく西欧資本主義的動態のウンターネーマーとして、フランス人がこの複合社会を一つの資本主義経済に編成秩序づけて、世界的に意味を持った特殊なカンボディア社会経済を成立せしめていた

のである。

かかる歴史的環境の下では、カンボディア大衆の貧困から抜け出することは容易でなかつたものとみてもよい。そして彼等の信奉する宗教は、タイ国の侵略占領時代に強制されたものとはいえ、消極的虚無的な涅槃を重んじ卑近な教理を説く小乗仏教であり、將に支配者に好都合である反面、カンボディア人社会を消極的諦観的に規制した面も見逃し得ないのであり、停滞性を裏づける一要因をなしているともいえよう。しかしながら、その様な貧困な停滞的経済社会であるからこそ、その様な消極的宗教倫理が長く強固に支配的となり得たのであり、その根源はこれを排出せしめた歴史的事実にあることはいうまでもないことである。

- (1) カンボディアの歴史については外務省アジア局昭和30年4月刊「カンボディア王国便覧」・国際日本協会1956年刊「アジア政治経済年鑑」及びアジア協会編昭和32年刊「東南アジア政治経済総覧上巻」に詳しい。
- (2) 企画院編纂「華僑の研究」(昭和14年刊)によれば、「華僑の南洋進出は一千年来の問題であるが、移民として問題となり得る様になつたのは15, 6世期以後のことである(74頁)。仏印米の集散地シヨロンには既に18世紀半ばに華僑が落着き、1866年には既に華商が500軒に上つた(116頁)。フランス領有前にカンボディア王国はトンレサップの漁業権を華商に許容した(114頁)」とあり、古くから華僑が進出していたことがわかる。
- (3) イブ・アンリー著「仏領印度支那の農業経済」東亜研究所訳(昭和16年6月刊)及び松田延一著「仏印農業論」(昭和19年刊)に詳しく述べられている。
- (4) 資本主義の構造とその発展を、これを動かす企業者機能の分析を通して明らかにされた、柏祐賢著「資本主義のメカニズム」(昭和32年刊)の第2章第2節第2「産業の形成」には、資本主義の発展途上に於ける植民地の持つ意味が、理論的に述べられて多くの示唆を与えてくれる。
- (5) J. S. Furnivall, *Netherlands India, a Study of Plural Economy*, 1939. 「ファーニバル蘭印経済史」南大太平洋研究会訳(昭和17年刊)なおファーニバルの理論と問題点の指摘は深沢八郎「二重経済と複合社会」(農業総合研究2巻4号)

貿 易 概 況

一国の国民経済の大まかな観察に際して、最も手近かな端緒を示してくれるものは、輸出入の貿易の概況であろう。そこでカンボディアの貿易概況をまずみておこう。

総人口約400万人、総面積にしても約北海道の2倍に過ぎないといわれている未開発の後進国で、貿易規模の大きい筈はなく、毎年の輸出入額は夫々5,000万ドル～6,000万ドルであり極めて僅かなものに過ぎない。

この輸入高を各国別に第1表にみてみよう。1955年の総額では輸入の14億231万リエールに対して輸入が16億6,463万リエールとなつており、差引2億6,232万リエールの入超となつている。これは輸出額のうちで大きな部分を占める米の出来不出来が天候により左右され、この不作に原因するところが大きいのであり、事実1953年及び1954年には僅かながら出超を示している。しかしながら今後とも入超の傾向は否定出来ないのである。これを国別にみれば、輸出入額で大きな部分を占めているのは、隣国のヴィエトナム・アメリカ・フランス及びその海外領土・マレー・香港等であることを知る。そのうちアメリカへの輸出額が極めて高く大きな出超を示していることは、戦後の新しい傾向であり、経済協力の意味もあり又原料獲得市場として進出してきたことも示すものであり、曾つてのフランスの地位をも脅すものとなつている。ヴィエトナムとは以前から同じ経済圏内にあつて、相互に生産物の流通していた事情が、独立した今日でも引続いて維持されている当然の帰結であり、なおフランスは多くの権益を残して、この国との貿易は大きな部分を占めていることを知る。しかしながらアメリカに多少ともおされ

第1表 国別輸出入高 (1955年1月~12月)

	輸 出 (千リエール)	輸 入 (千リエール)	差 引 (千リエール)
ヴィエトナム	379,795	438,874	- 60,079
ア メ リ カ	361,707	88,437	273,270
フランス及びその海外領土	359,933	428,571	- 68,638
マ レ ー	129,482	96,931	160,172
ホ ン コ ン	69,424	252,235	- 182,811
ベルギー・ルクセンブルグ	28,260	19,819	84,410
イ ギ リ ス	25,907	9,812	16,095
オ ラ ン ダ	15,042	9,323	5,719
ラ オ ス	11,032	435	10,597
ド イ ツ	9,444	24,541	- 15,097
日 本	9,180	161,284	- 152,104
そ の 他	1,108	133,373	- 130,265
合 計	1,402,314	1,664,635	- 262,319

(註) 東南アジア政治経済総覧 579 頁第38表より作成 1ドル=35リエール

てきつゝある傾向は否めない。マレー・香港は以前からの取引関係上深い継りを有するものであり、特に華僑資本との関連も見逃すことは出来ない。なお我国との関係は大きな入超を示しているが後表をも参照されたい。

それではカンボディアから輸出するものにはどのようなものがあるのだろうか。1955年の主要輸出品目を第二表にみよう。これで直ちにわかるように輸出品は全部第1次産業の農林畜産

第2表 主要輸出品目 (1955年1月~12月)

	数 量 (トン)	金 額 (千リエール)	割 合 (%)
ゴ ム	29,259	627,000	53.0
とうもろこし	65,965	151,000	12.7
米と副産物	100,594	113,000	9.5
カ ボ ッ ク	2,236	51,000	4.3
魚	9,532	43,000	3.6
林 産 物	62,000	40,000	3.4
いんげん豆	7,537	38,000	3.2
こしよう	702	38,000	3.2
畜 産 物	2,512	29,000	2.4
タ バ コ	2,030	24,000	2.0
大 豆	3,406	21,000	1.8
やし砂糖	3,018	11,000	0.9
合 計		1,186,000	100

(註) 東南アジア政治経済総覧 579 頁第39表より作成

物だけであつて、工業製品等は全然ない。いうまでもなく原料生産市場製品販売市場として、長い間の植民地政策下におかれていた国であり、これが現在もお反映しているのである。輸出額のうちでは、ゴムが50%以上を占めて6億2,700万リエールと第1位を示している。ゴムはフランス人の経営する典型的な熱帯植民地資本主義的農企業の生産物であつて、その面積は僅か3万ヘクタールに過ぎないが、その生産量は2万5,000トン~3万トン²⁾に及び主要輸出品で

ある。その輸出先はアメリカの1万7,000トンが大半を占めており、次いでフランスの8,000トンマレーの1,000トン等が主なものとなっている³⁾。ゴムに次いでとうもろこしの輸出額が大きい。即ち1億5,100万リエールで13%を占めている。この生産量は戦前の約40万トン程ではないにしても毎年5万トン~10万トンの輸出能力を持つものとされており、曾つてフランスの植民政政策の一環としてこの栽培奨励が行われ、その輸出先もフランスが主であつたのに対して、現在では日本及び近隣諸国に主に輸出されている。ゴムととうもろこしに次いで米の10万トン1億1,300万リエールが9.5%を占めて大きい。いうまでもなく米はカンボディアの主要農産物であり、又重要輸出品でもある。米の生産量が天候に大きく支配され、その豊凶が輸出にも大きくひびき、1955年には10万トンに過ぎないが、平年は30万トンの輸出能力を持つといわれているのであり⁴⁾、輸出のうち米の占める割合は大きい。この輸出先は、主として隣国ヴィエトナムであり70%近くを占める。次いでマレー及びフランスとその海外領土その他香港等に輸出されている。

このゴム・とうもろこし・米の3つの品目がカンボディアに於ける三大主要輸出品であつて、1955年もこれ等によつてその主要品目総輸出額の75%が占められている。その他カボック・鮮

第3表 主要輸入品目 (1955年1月~12月)

	数量(トン)	金額 (千リエール)		数量(トン)	金額 (千リエール)
(食糧品)	31,334	276,768 (20.1)	(金属及び金属製品)	21,564	423,484 (30.8)
乳製品	2,579	35,636	鉄鋼	7,333	39,808
野菜及び果物	8,680	59,801	その他金属	1,803	18,621
小麦粉	5,227	30,303	金属製品	8,150	83,967
肉及び魚罐詰	583	6,929	機械器具	1,227	70,535
砂糖	5,185	24,360	電気機械	732	65,123
野菜及び果物罐詰	1,125	11,548	自動車及び同部分品	1,852	101,685
ビール	6,007	34,393	自転車及び同部分品	429	25,664
ブドウ酒, アペリティーフ	459	7,015	その他輸送材料	14	1,436
ブランデー, リキュール	296	13,098	時計	24	16,645
その他の飲料	372	2,911			
煙草	655	34,743			
紙巻煙草	166	16,031			
(鉱物製品)	122,217	179,785 (13.1)	(その他製品)	12,340	161,943 (11.8)
揮発油	38,040	62,305	薬品	4,191	49,839
石油製品	44,351	66,699	化学製品	5,110	45,109
その他の鉱物製品	6,193	12,542	タイヤ	572	25,383
セメント	33,633	38,239	ゴム製品	142	4,980
(繊維品)	6,606	333,031 (24.2)	紙及びボール紙	2,240	22,429
生糸	36	12,889	紙及びボール紙製品	85	14,203
綿糸	832	38,659			
その他の糸	391	23,563	総計		1,375,011 (100)
魚網	33	1,988			
綿織物	2,041	144,693			
人絹織物	162	14,305			
その他の織物	739	73,777			
ジューツ袋及び布	2,372	23,157			

(註) 東南アジア政治経済総覧580頁より作成

魚・塩干魚・林産物・いんげん豆・こしょう・畜産物・タバコ・大豆・やし砂糖等も輸出されている。

次にカンボディアの主要輸入品目を第3表にみよう。一瞥してわかるように主な輸入品は鉱工業製品であり、その額はそれ程大きくないとはいえ後進国に対する資本主義先進諸国の販売市場の観を呈している。鉱物資源の開発調査も未だ遅れていて、国中工場の煙突もみず、年間発電量は2,000万KWHとされており⁵⁾、電燈のある街は州庁のあるところに限られているというような、あらゆる未開発の要素を含んでいる国ではあり、鉱物製品は1億7,900万リエールで輸入額の13%を占め、金属及び金属製品は最も多く4億2,300万リエールで30%以上を占めている。繊維品でも3億3,300万リエールで24%となっており、薬品その他の製品も1億6,100万リエールで11%を占めている。それに食糧品でもこれが製品であるものは輸入に依存しており2億7,600万リエール以上で20%以上を占めていることも注目されねばならない。特に野菜や果物までも輸入し、精製糖やタバコ等の輸入額も少くはない。又輸入額で大きい品目は、やはり大衆消費財である綿織物その他の織物類、及び自動車その他金属製品とその部分品等がめにつく。要するにあらゆる製造品を輸入に依存しなければならないという曾つての資本主義的植民地、後進国の様相を典型的に示しているものといえよう。

それでは我国との貿易関係はどうか第4表及び第5表をみよう。カンボデ

第4表 カンボディア及びその他旧仏印からの我国への輸入概況(金額1,000ドル)

	数量単位	カンボディア		南ヴィエトナム		北ヴィエトナム		ラオス	
		数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額
とうもろこし	MT	50,827	3,705	4,675	329	1,582	106	145	11
豆 類	MT	—	—	197	19	—	—	—	—
大 豆	MT	11	1	—	—	—	—	—	—
綿 の 実	MT	313	21	—	—	—	—	—	—
ひま の 実	MT	196	33	34	6	—	—	—	—
採油用雑種子	MT	861	152	1,426	255	492	90	—	—
生 ゴ ム	MT	10	9	5	3	—	—	—	—
木材及び製材	CM	—	—	—	—	487	15	—	—
麻 類	1000 LB	—	—	44	4	—	—	—	—
塩	MT	—	—	24,650	294	—	—	—	—
無 煙 炭	MT	1,600	37	19,244	390	362,770	7,704	—	—
れ き 青 炭	MT	—	—	106	1	—	—	—	—
原料別製品			69		62				
機 械 類			—		60				
雑 製 品			7		6				
特殊取扱品			1		4				
合 計			4,050		1,577		7,916		11

(註) 1. 昭和32年6月刊通商白書・商品別国別通関実績統計表輸入の部(1956年1月~12月)より作成
2. 合計金額は主要品目別合計額に必ずしも一致しない。

シアからの輸入は1956年に405万ドルを示している、南ヴィエトナム・ラオス等に較べると多少上廻るが微々たるものに過ぎない。そのうちでは、とうもろこしが約5万トン370万ドルで大半を占めていることを知る。その他の輸入品は大豆・綿の実・ひまの実・その他採取用種子・生ゴム・無煙炭等が僅かに輸入されている。

これに対して我国からカンボディアへの輸出は942万ドルを示し、曾つての仏印3国のうち南ヴィエトナムに較べると極めて少額ではあるが、輸入に較べると倍以上を示し、完全な片質

第5表 我国のカンボディア及びその他旧仏印への輸出概況（金額1,000ドル）

	数量単位	カンボディア		南ヴェトナム		北ヴェトナム		ラオス	
		数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額
食糧			97		718		—		34
生糸	1000 LB	35	138	136	575		—	4	22
化学薬品類			231		2,252		2		22
ゴムタイヤチューブ	MT	567	664	1,745	1,878		—	146	190
紙及び板紙	MT	1,517	353	11,090	2,309		—	57	18
絹糸	1000 LB	194	156	4,736	2,951		—	16	9
綿織物	1000 SY	12,609	2,832	56,362	14,018	9	3	3,509	940
人絹織物	1000 SY	1,836	413	27,984	6,157		—	230	63
スフ織物	1000 LB	3,156	681	25,907	4,042		—	296	89
セメント	MT	47,969	841	170,373	3,078		—	4,570	84
板ガラス	1000 SF	1,067	81	4,217	252		—	18	5
陶磁器	MT	290	68	1,388	428		—	—	—
棒型鋼	MT	599	78	1,026	148		—	—	—
亜鉛鉄板	MT	584	130	3,239	703		—	666	163
線材及び線	MT	620	91	3,032	435		—	—	—
くぎ・ボルト・ナット	MT	437	73	1,385	319		—	75	12
ミシン及び部品			272		648		—		44
絶縁電線	MT	45	121	230	298		—	14	48
衣類			105		71		—		9
合計			9,425		53,253		14		2,262

- (註) 1. 昭和32年6月刊通商白書。商品別国別通関実績統計表輸出の部（1956年1月～12月）より作成
2. 合計金額は主要品目別合計額に一致しない。
3. カンボディアへの輸出にはこの外、鉱物性燃料及び関連品4、合板3、毛糸42、その他人絹織物29、薄板17、厚板5、ブリキ板1、鋼管及び附属品9、鑄鉄管及び附属品5、伸銅品2、アルミ圧延品7、ほうろう鉄器7、内燃機関33、織機22、紡織機部品26、発電機16、電球類29、無線機械12、自転車完成品6、自転車部品12、肌着2、外衣類7、ボタン類2、玩具5、（各1,000ドル）及びカメラ20台がある。
（化学薬品類にはハツカ脳、医薬品、硫酸アンモン、プラスチック材料等を含む）

易である。輸出品の中では綿織物・スフ織物・人絹織物等の繊維品の占める割合が最も大きく輸出額の約半分近くを示している。次いでセメント・ゴムタイヤチューブ・紙及び板紙・ミシン及び部品・化学薬品類・鉄鋼類等の輸出額が大きいことを知る。その他種々の製品が輸出されているが、ともかくカンボディア輸入総額の2割近くを我国の製品が占めていることになり、その額はそれ程大きいとはいえないが、やはり重要な関係を持つものといえよう。

ところでカンボディアにある輸出入商社の数は、カンボディア人商社334に対して、外国人即ち仏人・中国人・印度人・日本人等の商社446とされている。このカンボディア人商社の数も可成り多く一寸意外な感じを与えるが、これももとは中国系・ヴェトナム系・印度系のものでカンボディア籍を持つてカンボディア人商社となつているものも相当含まれているのであり、純粋のカンボディア人商社は極めて僅かなものとなるであろう。このカンボディア人商社は顧問として政府要人等を招いて、相当政府の援助もありながら、やはり資本規模は小さく、外国人商社に圧倒されて余り問題とならない。現在資本の面からみるとフランスが後退して中国系華僑の資本が進出して、フランスにとつてかわりつゝあるのであり、これは中国大陸の政変に次ぐ台湾の政情不安、ヴェトナムの政治的経済的圧迫などにより、華僑がカンボディアに資本を移動させつゝあることとも関係しているものであり、現在21万と称せられる華僑は10年前に

は僅か10万に過ぎなかつたことから容易に想像されることである。調査途中の各地の精米所の新設、その他の新建築等が華僑資本によるものであつたこともこれを裏書きする一事実でもあろう。そして、この資本はより安定性を求めて、カンボディアからタイへ更にマレー・シンガポールへと国を超えた相互の連絡により移動しつつあるといわれている。

カンボディアと我国との貿易決済は、以前は清算勘定によつていたが、1956年よりドルで決済することとなつた⁶⁾。しかし公定レートでは1ドル35リエールとなつてはいるが、1953年のピアストル切下げ以来物価は著るしく騰貴しており、物によつては2倍も3倍も時には10倍近くも高いカンボディアとは、商取引も採算がとれないのが当然であり、大部分は香港を仲介にした香港決済によつて輸入されているのが現状であり、1ドルは85~90リエール位でなければならないとされている。又輸出の大部分はICA資金によるものであり、カンボディアとの貿易も種々の問題を内包しているものといえよう。

それはともかくこの貿易概況により、カンボディア国が依然として農業国原料供給地であり、製造販売市場となつてはいることが、容易に理解出来るのである。

それでは農業の実状はどのようなものであろうか。

- (1) アジア協会「東南アジア政治経済総覧」579頁の貿易額をドル換算したもの。
- (2) 外務省アジア局「カンボディア王国便覧」(昭和30年4月刊)及びアジア協会「カンボディア技術調査団報告」(昭和31年5月刊)
- (3) アジア協会「東南アジア政治経済総覧」
- (4) アジア協会「カンボディア技術調査団報告」
- (5) 前掲書
- (6) 通商産業省「通商白書」(昭和32年5月刊)

農 業 の 実 態

カンボディアの主要産業が農業であり、国民の9割までが農業に従事しているといわれているが、その農業の営まれる一般的環境条件はどのようなものであろうか。人間社会が単なる環境への適応ではなく、むしろこれを克服して主体的に形成してゆくものではあろうが、なお自然を相手とする農業に於て、又特に南方農業の観察には環境条件の考察が重要性を持つものと思われる。そこでまずこの環境条件をやや詳しくみておこう。

1. 環 境 条 件

(1) 自 然 条 件

農業生産が自然に対する人間の働きかけを基底として行われるものである以上、この現実の自然環境が大きく農業生産を方向づける与件として厳存していることはいうまでもない。勿論この自然の克服は主体的な人間の働きによるのではあるが、そうだとしても自然環境の全面的克服を人間が為し得るものではなく、その一部を克服利用するに過ぎないのは事実である。その様な意味においても自然に対する主体者側の社会経済的条件が揃わない場合には、自然の克服開発は遅れているのであり、あたかも自然条件に対する単なる適応として農業生産が営まれているようにもみえるのである。南方農業は自然条件が余りにも強烈に作用することにより、これが決定的な要素であるかの如き理解もあるが、あくまでも一つの与件であり要は主体の社会経済的働きにあることはいうまでもない。というものの決して自然条件の重要性を否定するものではなく、この大きな前提制限要素の内部に於てこれを克服しつつ農業生産が行われつつあるものといえよう。

カンボディアはタイ・ラオス・南ヴェトナムと国境を接し、南部はタイ湾に望む17万平方キロの小さな国であり、北緯11度から15度の間に位しているので、赤道地帯程ではないにしても熱

帯圏の一部に属している。地勢はタイ湾に望む南部にはエレファン高原及びカルダモム高原が南北に走り、北部タイ国境にはダンレク高原が東西に走つて境をなしている。東部はメルブレイ及びボローヴェン高原及びモイ高原の傾斜面山林によつてヴィエトナムと境している。これ等の中央に標高100米以下の主として沖積土からなる平原が広がっている。この平原の略中央部にはグランラック(トンレサップ)という琵琶湖の3倍もある湖を有し、遠く中国にその源を発するメコン河がラオスを通りカンボディアの中央を北から南へ貫流してヴィエトナムへ流れている。このメコン河とグランラックの流れは首都プノンペンで会して、メコンの水も雨季には一部グランラックへ、乾季には共にヴィエトナムへ流れて、グランラックは自然の大きな貯水場の役割を果している。このメコン河周辺とグランラック周辺の沖積地帯が肥沃な農業地帯であり、古くから開けた原住民の米作地帯である。この沖積地帯の周辺山間地帯は殆んど三疊紀上層砂岩地帯であり、灰色或は赤色の砂岩層であつて密林或は疎林地帯をなしており、山に住むプノン族が各地に点在するほか農業は営まれていない。それにヴィエトナムから東西に走る玄武岩の崩壊した有名な赤土地帯が、コンボンチャムを中心にコンボントムの近くまで伸びており、ここに植民地農業として有名なゴムのプランテーションが、フランス人の手により経営されている。その外ヴィエトナムからストントレン近くまで延びてきている第一紀層、及びコンボンスプウ西部一帯の第一紀層には、未開のジャングル地帯が形成されている。

自然的環境条件のうちで農業生産に規定的な条件となるものは以上の様な土地の性状と並んで気象条件が最も重要であろう。カンボディアは熱帯圏に属するとはいえ、その中央平原地帯は大陸性気候をもあわせ持つている。第6表気象概況をみよう。平均温度が27.7度であつて東京の14.1度に較べて非常に高温である。しかも一年間を通して温度の変化が極めて少く、その中では11月の終りから12月にかけて最も温度が低く、12月の最低温度は20度近くになるが、その後次第に上昇して3月4月にかけて最も高温となり、4月の最高温度は35度以上となる。雨量の方では年間1,400耗前後であつて、東京の1,600耗よりはいくらか少い。この雨量は年間通じて2

第6表 気象概況

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均温度 (C)	26.7	27.7	29.4	29.6	28.5	27.7	27.5	27.7	26.6	26.9	26.6	24.3
最高温度 (C)	31.3	33.7	34.9	35.5	33.9	32.5	32.2	32.7	30.7	30.5	29.6	28.3
最低温度 (C)	22.6	23.2	24.5	25.1	25.0	24.7	24.6	24.8	24.1	23.9	23.7	20.6
雨量 (mm)	8.9	10.3	38.4	82.5	143.2	145.4	154.7	158.8	226.9	257.5	139.2	44.5
降雨日数 (日)	1	1	3	6	15	15	17	17	19	18	10	4
平均湿度 (%)	71.2	70.6	70.1	73.6	80.7	80.4	82.9	82.2	84.3	83.2	79.2	75.2

(註) 東南アジア政治経済総覧545, 546, 547頁より作成
温度はプノンペン1950年度。降雨状況はプノンペン年平均を示す。

期にわかれてその差が甚しい。即ち12月から4月にかけて50耗前後となり1月2月が最も少く10耗内外となり、所謂乾季と称される。其の後5月から11月にかけて150耗前後の雨量であり、この時期が雨期を形成する。調査期間の2月初めから3月中旬にかけてプノンペンでは一滴の降雨にも会わず、如何にこの時期の乾燥が甚しいかがわかる。又雨季といつても日本の梅雨等の様なじめじめした雨ではなく、スコールがどしやぶりの雨を降らしてきつと晴れるという性質のものである。この高温多湿な雨季には、植生力旺盛にして万物が生気をとりもどすとともに主要米作の好適な環境を作り、メコン河その他の小河川も氾濫して、原住民の農業は此の時期に主として行われる。これに反して12月から4月までの高温乾燥の時期には万物がその成長を止め、草原は枯れ水田は乾燥して大きな亀裂を生じ、現状ではとうてい作物の栽培は不可

能な状態であり、局地的なとうもろこしや畑作栽培が行われるに過ぎない。といつても水利の便のある所には一部2月稲3月稲等の乾季の栽培もみられるのである。これがカンボディア一般の様相である。

これ等の特徴的な気候は、11月頃より乾燥した東北からのモンスーンが吹き全土を乾燥状態に陥らしめるのに反して、3、4月は南風、5月からは逆に湿気を含んだ南西からのモンスーンによつて全土に雨を齎すのに依る所が大きいのである。そこでこのモンスーンの影響も局地的には地勢や地形の関係上いろいろの形をとつて表われるが、特にタイ湾に望む南部カンボット地方ではプノンベンよりも温度も僅かに高く、雨季の南西モンスーンがエレファン高原及びカルダモム高原に直接当るから、多量の降雨を齎し、平均雨量は年5,000耗を超えて海洋性の気候を呈し、唯一の水田二毛作地帯であり、華僑による特殊なこしよの産地を形成している。海岸にはマングローブ・ニッパヤシ・ココヤシ等が繁茂し、山地も密林に覆われているところが多く優良木材の産地となつている。

北部及び東北部周辺山間地帯は、ダンレク・メルブレイ・ボローベン高原に西南モンスーンがさえぎられるところでもあり、雨量も中央平原よりも多く2,000耗前後の降雨を齎し、温度はプノンベンよりもやや低いがストントレンからベンサイへかけての密林の形成を可能にする。その内縁三疊紀層地帯の雨量の多くない地方には広大な疎林地帯が形成されている。又ミモット・コンボンチャムに通ずる赤土地帯はモイ高原に直接当るモンスーンが雨を齎し、年間雨量2,500~3,000耗を示して温度はプノンベンと殆んどかわらないので、優良なゴム栽培の好条件を備えている。何と云つても多少大陸性気候を帯びたメコン沖積地帯が、カンボディア農業の中心地帯であり、いわばカンボディアに於ける農業の先進地帯とも云えよう。

この中央のグランラックは長さ150キロ巾32キロその水面積3,000平方キロといわれ、乾季の水深は40~60センチメートルに過ぎないが、雨季になると多くの河川の水とメコン河の水が逆流してその水深8~10米となり、面積も3倍にふくれて1万平方キロにも達するといわれている。この周辺は叢林及び葦原によつてかこまれているが、淡水魚が多く中国人及びヴィエトナム人による漁業が行われ、大きな漁業資源を抱えた漁場を提供しており、重要な輸出品である塩干魚の主要生産地でもあり又魚醬（ニョクマム）の産地ともなつている。

主としてアガール著「仏領印度支那」と「東南アジア政治経済総覧」を参照した。

(2) 経済的条件

農業の生産方向を決定づける経済的条件のうちに最も重要なものは価格の関係であり、そのうちでも特に運搬の難易に基く価格の変化があり、経済的距離がまず問題となるであろう。

カンボディアには現在貿易港としては首都プノンベンにあるプノンベン港が唯一のものであり、これとてもサイゴンからメコン河を200マイルも遡上つた河港であつて、途中ヴィエトナムとの国境では一度通関手続をも済ませねばならず、又雨季にはメコン河の10米位の増水によつて3,000トン級の船も通航出来るが、乾季にはせいぜい1,000トン級の船しか通ることが出来ず、しかも河口近くでは船底が砂と接触することもある位で、距離的にも又船重量にも制限を受けて極めて不便であり運賃も高額となる。今フランスの経済援助によりタイ湾に望むコンボンソムに港灣を構築中であり、これが完成すれば首都プノンベンよりは少し離れているが、自由な貿易港として多大の貢献をなすことはいうまでもない。しかしこのメコン河及びトンレサップ河その他大小河川は、国内運輸の面からは非常な役割を果しているものであり、特に雨季ともなれば自動車輸送よりもこの船便に多く依存するのであり、乾季にはクラチエ北方に浅瀬が出来るのでクラチエまでしか大型定期船は就航していないが、増水期ともなればカンボディア北端の

ストントレンまで大型船が航行出来るので運輸の便は極めて良くなるのである。プノンベンからグランラックまでも同じく雨季は船舶輸送の好機であり、その他の河川でも同様である。

次に鉄道をみよう。カンボディアの鉄道は僅か一本、首都プノンベンからグランラックの南を通つてタイとの国境ポイベットに通ずる狭軌単線の国有鉄道があるだけであり、これはタイ側のアランヤプラテートからタイの首都バンコックまで通じているが、バンコック・プノンベン間は約700キロもあつて、鉄道による輸送も仲々困難である。これはもともと乾季にグランラックの船便がとまるので、その周辺の米及び塩干魚等の輸送の為に施設されたものとされているが、毎日二三往復位の輸送力では大きな役割を果しているとはいえない。客車もディーゼルカーや普通列車及び混合列車として走っているが、後述の自動車道路が発達しているので利用者も少く、華僑や官吏軍人僧侶等が主であり、原住民は貨車の屋上に乗つて運ばれるものも可成り多くみうけられた。コンボンソムに港灣でも出来れば、プノンベンから鉄道が施設される予定でもあり予備測量も行われているが、重要な輸送機関となるであろう。

これにひきかえ陸路の輸送には、自動車路が極めて発達していて、鉄道の400軒に対し3,000軒とされている。殆んど輸送がこの自動車に依存しているといつても良い位である。首都プノンベンを中心に自動車道路は網の目の様によく発達しており、特に一級道路ともなれば、大体7~10米幅の道路に5米位がアスファルトによつて完全に舗装されて快適な自動車路を作つており、1軒ごとにプノンベンからの距離と近くの中小都市からの里程の書かれた道標が立ててあり、旅行者には極めて便利なものでフランス時代の道路行政の完全さが窺える。現在は内戦によつて破壊されたり、その他の理由で舗装のとれたところもあつて、復旧が遅れているところもあり、タイ国境からプノンベンまでは世界第二の悪路ともいわれているが、その名に値するところは極めて僅かであり、一般には極めて良好な自動車道路といえよう。その破壊された場所も炎天下に復旧が急がれており、多くの労働者が働いているのを各所に散見したのであり、又道路用の碎石所の近代的なものもシソフォンその他でみかけることが出来た。普通乗用車の速度が毎時80~120軒であることからその道路の良さは想像されるであろうし、大型バスやトラックでも時速80軒が普通であることから道路の良いことがわかる。カーブも時速100軒位を標準とした傾斜がついているし、水田地帯では路面も雨季に備えて可成り高くなつてゐる。

主な定期路線はプノンベンからヴィエトナムのサイゴンへ230軒、プノンベンからタイのバンコックへ734軒、プノンベンからグランラック北側一周のコンボントム・シェムレアップ・シソフォンに通ずる434軒、プノンベンから唯一の南海岸カンボットへ132軒、プノンベンからラオスへ通ずる北進のコンボンチャム・クラチエ・ストントレンに通ずる488キロがある。何れも一部には修復中の悪路もあるが、これ等幹線は大半は良好な道路である。しかしこの支線である二級道路三級道路になると舗装もゆきとどかぬ所も多く、又雨季の水によつて破壊されたところもあり、乾季ですら自動車の難行するところも少くない。

自動車路は良く発達しているが、ここに障害となるのはメコン河及びトンレサップ河に橋梁が全然なく、これを2,3隻のフェリーボートで一度に5~6台の自動車しか渡せないことであり、軍用自動車優先であり遅れる時は1時間以上も待たされることもあつて、サイゴンに行くにもコンボンチャムやラオスへ行く場合にも一つの関門となり極めて不便を感じ、輸送力を減殺していることはいうまでもない。その他の橋梁も内戦で落されたり、雨季の増水で破壊されたりして現在架設中の所もあつて迂回路を難行しなければならないところもあるが、幹線路の橋は大半アメリカの経済援助によつてようやく修復を終り快適な橋梁が出来上つている。

この陸上及び河川の輸送部門は、大半が華僑の手に握られており、自動車も渡船も華僑所
有

のもので殆んどが占められている。自動車も熱帯特有の暑熱とスピードに適するように意の注がれたフランス製のものが依然として多いが、高級車等はアメリカ製品も可成り入ってきている。日本製品は馬力は強いがスピードが出なくてエンジンが焼ききれたり、スクーターも調子は良いが消音装置が悪く高音を発して嫌われたり、その使用方法の徹底と現地にマッチした改良及びアフターサービスも必要となろう。

ともかく陸路の輸送は大半がこの自動車によらねばならないので、大型トラックは貨物を満載し、又バスも屋上に果物、自転車その他の荷物や、時には人をも満載して走っており、輸送費も可成り高いものにつく。船便は最も安く、この舟運の便のある所及び鉄道沿線はそれ程ではないが、これ等の便のない所は特に輸送費も高額につくのである。

次にカンボディア各地のガソリン1リットルの小売価格をみてみよう。タイのバンコックで第7表 ガソリン1リットルの価格 は1リットル1.74バーツであり、バーツ20円としても34円

場 所	価格(リエール)
ブノンベン	4.75
コンボンチャム	4.80
クラチエ	5.40
ストントレン	6.05
コンボントム	5.40
シュムレアップ	5.80
シソフォン	5.60
バツタンバン	5.40
プルサット	5.20
コンボンチナン	5.00
コンボンスプー	5.00
カンボット	5.10

に過ぎないが、ブノンベンでは4.75リエール約48円であり国際的にも高いことを知る。そのブノンベンを最低の4.75リエールとして、北進すればコンボンチャム4.80リエールでそれ程上昇しない。ということはここまではメコン河を逆上つて大型船が乾季でも自由に航行出来る位置にあるからである。クラチエ5.40リエールで急上昇してストントレンになると6.05リエールとなり最高を示す。乾季には全くトラック輸送に依らねばならないことに基くのである。グランラック北周をみるとコンボントムでは5.40リエールでクラチエと同価格であるが距離的にもほぼ等しい。これがシュムレアップに行くと5.80リエールとなり、この附近で最高となり、シソフォンに行けば鉄道沿線でもあり5.60リエールと廉くなる。バツタンバン・プルサット・コンボンチナンに來ればブノンベンへも近付きしかも鉄道輸送の便もあるので距離の割には安く、5.40, 5.20, 5.00リエールとなる。これがキリロム・コンボンソムへ行く途中コンボンスプーでも5.00リエールであり、南海岸カンボットでは5.10リエールを示している。要するに船便・鉄道輸送の便のある地方は中心地ブノンベンからの距離の割には安く、これがトラック輸送に依存するところは高価格を示すことがわかる。一例をガソリンにとつて例示したのであるが、あらゆる輸入製品がその種類別の差異は生ずるとはいえ、同様の影響を受けて地方価格が高価となることはいうまでもない。又ブノンベン市場に集まる農産物その他の価格も同様の影響をうけ、地方価格の低価は免れない。しかしながらブノンベン周辺の蔬菜作地帯や集約的果樹栽培地帯を除けば、経済的距離による作物栽培地帯の分化はみられず、むしろ前述の如く自然条件の良否と社会的条件に基く作物栽培の地帯が区分出来るに過ぎない。

市場(プサール)は、ブノンベン市内には多く、中央市場及び大きな市場が2, 3個所、その他中小市場が各区にある。各地方省州庁所在地は又街の中央に市場を持つていて、その他の中小の都市も必ず街の中央には市場がありこれを中心に街が開けた感じである。これ等の市場は市場といつても百貨店と同じ様なあらゆる日用製造製品から農林水畜産物の小売消費市場であり、大概のものはこの市場へ行けば購入出来る。その周辺に卸売市場のあるところもある。大市場ともなれば農民が直接市場に生産物を持ち込むことは殆んどなく、周辺の卸売市場に売却して帰るのであるが、小都市では庭先の極めて僅かの蔬菜類や果物を籠に入れて直接市場で消費者に売却することもある。しかしその様に直接市場に生産物を持ち込む様な農家は稀な部類に属するの

であつて、大半の農家は集荷を担当する華僑に庭先で販売してしまうのである。この庭先価格を38とすれば華僑の売価は58となり、しかもこの輸出価格は100となるといわれているので¹⁾、如何に庭先価格が廉価でたたかれ、市場価格が高価になるかが推察出来るのである。と同時に農家の購入品も又如何に高価なものを購入しているかが類推出来る。

特に戦後の物価の騰貴と1953年5月に行われたピアストルの切下げによつて、インフレ傾向にあり小売物価の値上りも甚しい。第8表をみると消費者物価では1949年を100とすれば、1956

第8表 消費物価及び卸売物価

年次	消費物価指数		生産物卸売価格 (リエール)			
	一般指数	食糧品指数	粳 68キロ	白米 25%碎米 100キロ	40%碎米 100キロ	赤とうも ろこし 100キロ
1949年	100	100				
1950	112	106				
1951	120	113				
1952			132	333	324	141
1月	126	120				
12月	141	139				
1953			144	371	359	187
1954			112	339	301	168
1955			132	385	360	208
1月	183	168				
12月	202	185				
1956						
3月			150	?	?	220
5月	212	195				

(註) 消費物価指数は1949年を100とした指数でブノンペンに於ける中流家庭をとる。この1950, 1951, 1952年は、カンボディア王国便覧(外務省アジア局刊)15頁より、以下の指数及び卸売価格は東南アジア政治経済総覧より作成

年には一般指数は2倍以上であり、食糧品指数はやや低いが195で2倍近くになつてゐることがわかる。これは中流家庭を対象としているのであり、労働者階層では食糧品指数も更に上廻ることも当然である。又消費物価の中でも輸入製品の値上りが著しいこともいうまでもない。生産物の卸売価格をみても、消費物価程ではないにしても値上りしていることがわかる。この様な一般物価の騰貴傾向にある時には、農家の購入する日用品及び生産手段の価格の急上昇に較べて、農家の販売する生産物価格のやや緩慢な上昇との間には、シエールの開きが甚しくなることは当然であるが、しかも大半の農家が未組織であつて、益々利に敏い中間華商の活躍の場を与えることになり、利潤余地を一層拡大することによつて、シエールの開きを固定的に更には益々拡大する方向をとり、それだけ農民を圧迫する結果ともなつてゐるのである。

ブノンペンの小売物価を示すと次の第9表の如く、農産物価格は安く、工業輸入製品の高いことがわかる。

- (1) 河合恒「カンボディア国の農業事情と日本人移住問題」(農業と経済22巻11号)その他全般に亘り「カンボディア技術団調査報告」及び「東南アジア政治経済総覧」等を参照した。

(3) 社会的条件

人間そのものがもともと社会的な存在であるから、その人間の営む農業も又種々の社会的環境に制約される面も多いことはいふまでもない。現実のカンボディア農民の農業を営む社会的条件といつても、極めて多種多様にわたるものではあるが、2,3の問題についてみておこう。

第9表 小売物価 (プノンベン市場及びその周辺・1リエールは約10円)

(農 産 物)				(畜 産 物)				(製 造 製 品)			
品 目	単 位	リエール	種 類	単 位	リエール	品 目	単 位	リエール	品 目	単 位	リエール
白 米	1kg	3~10	黄 牛	1頭	2,000~3,000	鉛 筆	1ダース	25~20	ノ ー ト	1冊	10
黒 米	1kg	8	水 牛	1頭	1,500~2,000	絵 葉 書	1枚	4~5	プノンベン地図	1枚	12
赤 米	1kg	3	豚	60kg	900~800	マ ッ チ (小)	1個	2	煙 草 (20本入)	1箱	3~20
白 モ チ	1kg	8	豚 肉	180匁	21	ス プ ー ン	1個	10	ね ぢ ま わ し	1個	15
白 豆	1kg	20	成 鶏	1羽	20~50	く ー わ	1個	46	モ ン キ ー	1個	75
緑 豆	1kg	20	あ ひ る	1羽	40~60	靴 下 木 綿	1足	25	靴 下 ナイロン	1足	65
ら つ か せ い	1合位	3	卵	1個	2	レ ー ヨ ン	1米	85~120	ゴ ム ホ ー ス	1米	15
は す の 実	2個	1	(生 活)			石 鹼	1個	10	ビ シ	1本	30
か や	ひとつかゝえ	10	朝 食(レストラン)	20		ピ ー ヨ ン	1米	85~120	オ ー ト ミ ー ル	1罐	40
こ し よ う	1kg	100~120	朝 食("	30~50		グ ム ホ ー ス	1米	15	ホ ル マ リ ン	1本	70
ね ぎ	1束	2	夕 食("	50~80		石 鹼	1個	10	コ ン デ ン ス ミ ル	1罐	30
き ゃ べ つ	1個	12	夕 食(野天, うどん)	10~15		ビ シ	1本	30	ク (小)	1罐	30
と う が ん	1個	3	印 度 料 理	1回	30~50	オ ー ト ミ ー ル	1罐	40	ク ロ ロ マ イ セ チ ン	10個	174
白 菜(小)	1個	2	支 那 菓 子	2個	15	ホ ル マ リ ン	1本	70	モ ビ ー ル オ イ ル	1罐	75
パ ナ ナ	1房	3~15	パ ン	1個	3~5	コ ン デ ン ス ミ ル	1罐	30	グ リ ー ス	1kg	30
モンキーバナナ	(20本)	6	白 飯	1個	1	ク (小)	1罐	30	国 旗	1枚	25
パ バ イ ヤ	1個	2~3	ジ ュ ー ス	1本	3~10	ク ロ ロ マ イ セ チ ン	10個	174			
西 瓜	1個	5~10	コ ー ヒ	1杯	3~5	モ ビ ー ル オ イ ル	1罐	75			
リュウガン	2個	1	マ ン ト ー	1個	2	グ リ ー ス	1kg	30			
パイナップル	1個	10	宿 泊 料 の み		65~150						
サボジラ	2個	1	あ ん ま	1回	40~70						
シュールサック	1個	8	医 者 1回往診		400						
牛 乃 乳 果	2個	5	血 液 検 査		340						
ザ ボ ン	1個	8~10	シ ク ロ	1km	2						
マンゴー	1個	2~5	メコン渡し 自動車		50						
パラミツ	1個	7	人 間		2						
ネ ー プ ル	1kg	25	自動車 プレートナンバー書入		280						
小 み か ん	1kg	22	グ リ ー ス 補 給								
み か ん	3個	5~7	運 転 免 許 料	1人	72						
み か ん	1kg	30	散 髪	1回	18						
さとうやしの実	2個	1	写 真 手 札	1枚	5						
やし さ と う	1kg	2~3	(焼付のみ)								
こ こ や し の 実	1個	3	郵便封書	バンコックまで	4						
グラジオラス	1本	2		日本まで	8.5						
カーネーション	1本	5		日本まで	6						
田	1ヘクタール	10,000									

(イ) 人口と土地

まず第10表によりカンボディアの面積及び人口をみてみよう。産業別人口構成等は統計も整備されていないし、世界統計年鑑にも挙げられていないので、正確な数字は掴めないがともかく、約17万平方キロの面積に約400万の人口に過ぎず、その人口密度も平方キロ当り23.62人であり、日本の平均の約10分の1で極めて少いことがわかる。この人口のうちヴィエトナムその他のインドシナ人が約32万、中国人華僑が21万、ヨーロッパ人約4,000人とされているので、カンボディア人は約350万とみなされており、そのうち約9割の300万余りが農業人口となる。

第10表 州別面積人口 (1951)

州名	平方キロ	人口	人口密度	耕作面積 (千ヘクタール)	稲生産高 (千トン)
Phnom Penh	46	363,800	7,908.70		
Kandal	3,700	527,993	142.70	73	80
Takeo	3,450	364,295	105.59	153	168
Prey Veng	4,750	361,029	72.43	188	226
Svay Rieng	2,874	207,050	72.04	130	143
Kompong Cham	9,491	570,711	60.13	110	143
Kratie	24,600	79,439	3.23	12	13
Stung Treng	21,200	47,000	2.22	4	3
Kompong Thom	26,750	211,500	7.69	65	85
Siem Reap	15,950	215,060	13.48	47	61
Battambang	18,550	371,000	20.00	140	224
Pursat	12,300	129,653	10.54	37	52
Kompong Chhnang	5,350	196,000	36.64	33	43
Kompong Speu	6,800	176,469	25.95	85	77
Kampot	16,700	252,968	15.15	102	122
合計	172,511	4,073,967	23.62	1,180	1,440

(註) 東南アジア政治経済総覧 548 頁第13表 575 頁第30表第31表より作成

この各州別人口密度をみると、プノンペン市は別として、カンダル・タケオ・プレイベン・スバイリエン・コンボンチャムの各州が平方キロ当り60人以上で最も高いことを知る。これ等の州がメコン河及びグランラックの沖積デルタ地帯であり、農業の最も発達した地帯をなしているのである。耕作面積及び稲生産量をみても他の地域よりも極めて多く、米作水田地帯であるのは云うまでもなく、その他の農産物及び畜産物等の生産量もこの地域に多い。これがクラチエ・ストントレンのメコン河上流の2州になると、人口密度も極めて低く、僅かにメコン河周辺の耕地を有するだけで、クラチエ・ストントレンでは米の自給も出来ず他州より移入しなければならない状態であり、農業生産よりも未開発の林業地帯をなしている。グランラック北部のコンボントム・シムレアップ州は僅かに人口密度は高くなるが、やはり多くの森林地帯を擁して、グランラック周辺が浮稲地帯であり、又多少漁業の行われる地帯でもあつて、主要な農業地帯ではない。グランラック北西のバタンバン州は土壌も良くカンボディア第一の穀倉地帯とされており、米の生産額も他州より群を抜き、精米所も多く米の試験場等もあり、米以外の果樹とうもろこしその他農産物畜産物の生産量も多い。グランラック南部のプルサットでは未開発森林地帯も多く残されているがコンボンチナンと並んで農業・水産業が可成り発達している。メコン河及びグランラックに接していないコンボンスプーでは、雨量の関係もありヘクタール当り稲の生産量は少ないが、やし砂糖その他農畜産業は相当発達している。カンポット州では未開発の森林を多く有し、人口密度は小さいが、唯一の海に面した地域で平坦地も可成り広く米の産額も多い。熱帯果樹の栽培、特にこしょうの生産地でもあつて、畜産も最も活発で農業も盛んである。又海に面している関係上沿岸漁業も行われ、塩の生産も行われて経済的に活気のある州でもある。古くから華僑の入り込んだ地域という特殊性を持つている。

ともかく人口密度と農業地帯の関係は、メコン河下流の人口密度の高い地方が米作農業地帯であり、人口稀薄なメコン上流及びグランラック北部地方はむしろ森林地帯でもあり、その中間の所は各州によつて多少異なるが農業も可成り発達している地方と概観出来る。しかし人口密度は小さくとも、これが一部の耕作可能な地域に集中しているのであり、その地域だけは人口稠密となることはいうまでもなく、そこに水田農業が営まれているのである。そして水稻作の

可能な所に原住民の農業が営まれているといつても過言ではない。

耕作面積は正確ではないが約120万ヘクタールとされており、農家戸数の統計がなく、正確には知り得ないが大体一戸当り1~3ヘクタールの耕地は所有している。一般に5ヘクタールは超えないとされているが、実際の我々の調査の結果でも4ヘクタールが最高であつた。これは我国の平均耕作面積よりは多少上廻るとはいえ、栽培技術も幼稚で粗放的な経営を行い、平均反収にしても我国の5~6分の1であり、一戸当り米生産量も我国を上廻るとはいえない。従つて一戸当り経営耕地は多少広いが、同じ1ヘクタールの土地の人口扶養力は極めて低位の段階にあり、労働生産性を高める為の資本集約的経営とは根本的な相異を持つてるのであつて、むしろ既耕地水田地帯に於ては、現技術段階の低さの故に耕地の広さの割には少い人口しか抱えていないといえよう。そしてこれ等農家の家族員は耕耘播種或は植付け及び収穫脱穀調整の労働過程には勿論必要な労働力ではあろうが、その中間の過程には遊休化するのである。従つてこれを支えるものは農家生活水準の低さに基くことはいうまでもない。そしてこれが又社会的需要の増大という刺戟を伴わない為に既耕地に対する内部的集約度を高める方向に向わず、又外延的に耕境拡張的にも仲々作用しないのである。そうはいふものの現在の技術段階では自然力である水の支配する力が異常に強く働くので、既耕地に於ける集約度限界をそう高くすることも困難である事情も横たわるので、既に好条件で利用される土地は殆んど既耕地となつていともみられるのであり、ここで排出された労働人口は、むしろより劣等地ではあるが広大な未開地を求めて外延的に拡大する傾向の方が強いといふことはいえそうである。そして又現段階ではこの可能性の方が強いのである。この場合にも個人的な生存の為の開墾の場合には、まず水利の便と開拓の容易さが先決条件となるので、土壤の肥沃度等は第二義的な意味しか持たないように思える。といふことはクラチエ・ストントレンでみかけた山間水田は、殆んど砂質の不良土壤と思われる疎林地帯の中にあり、優良な土壤と思われる密林地帯の開墾は殆んど行われていない。又シソフオン近くで開拓に従事していた兄弟も瘠薄な草原地帯の開墾を行つていた。これ等をもみても零細な資本力で行う外延的な耕地の拡張には、第一に開墾の容易さが先に立つものと思われる。これに対して政府機関の手によつて為されたというカンダル・カンポット或はバツタンバンの開墾地は、数年前までは鬱蒼たる森林地帯であつたといわれる場所に近代的なアメリカ製機械により広大な開拓が進められており、更に拡大される予定だとも云われ、又プランテーションのゴム園近くの開墾地も広大な森林面積を開墾しており、強力な財政的投資による開墾か、或は高度に資本計算を行う大資本による企業に於てはじめて、優良土壤のジャングル地帯をも開墾可能にすることを物語るものであろう。

ともあれ好条件の土地は既耕地として利用されているのであり、残された土地は自然的条件か或は経済的社会的条件に於てより劣る土地であるので、同じ稲作をやるとしても広大な灌漑施設を必要とするであろうし、むしろ既耕地の米と競合しない新しい作物の導入の方が、現段階ではより収益力を高めることとなろう。何れにしても莫大な資本を必要とするであろうことはいうまでもないことである。

「カンボディア技術団調査報告」「東南アジア政治経済総覧」等を参照した。

(ロ) 宗教と習俗

カンボディア人の日常生活と仏教との関係はきりはなせない程に密接に結びついており、カンボディア人相互を規律している間柄的意識もこの宗教的自覚に基いているものと思われるのであり、これが又カンボディア人の経済活動にも深く影響していることも見逃せないのである。

カンボディアの古い時代にはヒンズー教と大乘仏教とが王室の庇護の下に極めて栄えていて、カンボディアがその威勢を東南アジア一帯に大いに昂揚した時代は、これ等宗教の最盛時

代であり、有名なアンコールワットはヒンズー教時代に又アンコールトムのバイヨンは大乗仏教時代に建立された大伽藍とされており、その規模の雄大莊嚴な趣は今なお全世界の観光客をひきつける魅力ともなっているのである。しかし乍ら度重なる戦乱の後にタイに征服されてからは、諦観的消極的な小乗仏教が一般大衆に支持されることとなり、今日に及んでいるのである。

現在も仏教は国教として憲法にも認められているのであるが、この宗派にはタイの宗教改革により導入された Thomayutt 派及び在来の Mohanikay 派の二派が勢力を競っているが、現在では第11表の如く依然として Mohanikay 派が圧倒的な比重を占めている。この各々の僧侶の

第11表 寺院及び僧侶

	Thomayutt 派	Mokanikay 派	合計
寺院数	101	2,595	2,696
僧侶数	2,064	61,180	63,244

階層は劇然と格式が区別されていて、僧侶の生活は厳しい戒律によつて規制されている。そうすることによつて民衆の絶対的な信頼と尊敬の念をもち得ているのである。所謂五戒として知られている「殺生を

(註) 東南アジア政治経済総覧556頁より作成

しない・盗みをしない・淫らなことをしない・虚言をつかない・酒の類を飲まない」¹⁾ という戒律は、僧侶には絶対的のものであろうが、一般民衆にはこれを守るかどうかは各人の解脱の爲めであり、強制されるものではない。しかしながら、道徳律による幼少時代からの宗教的雰囲気になじみ、近くの寺院及び僧侶を中心とした仏教的行事が農村の中心的行事と一致しているところに於ては、表面に現われないとしても暗にこの戒律は精神生活の依り所として、行動の規範ともなっているものと思われる。そこで仏教の章句にある「すべて悪しきことをせず、善いことを実践し、自己の心を浄めること、これが仏陀たちの教である」の善いこと即ち戒律の実践により心を浄めることが根本となり、しばしばカンボディア人の善良さが問題となり、彼等の間にも「心の美しさ」が極めて尊ばれていることもこの様なところに起因するものではなからうかとも思われる。そして往々にしてカンボディア人で商業に従事するものがあれば皆これを蔑規の眼でみて、決して正当な評価を行わないというところにも²⁾、かかる宗教的戒律の実践に於て、職業としての商業が正しい行為とは認められないというところから因由しているのではなからうか。それが又華僑等による流通機構の支配を今日の如く全からしめた一因を為しているものといえないだろうか。

現在6万といわれる僧侶の生活と2,700を数える寺院は、カンボディア人の喜捨によつて維持されている。その椰子の葉で葺かれたお粗末な住民の家屋と較べて、農村の寺院はセメント或は白壁作りの極めて華麗な建物であり、我々の目をみはらせるものがあり、その修復改築中の所も多い。この様な経費は、毎日の僧侶の托鉢と並んで豊かではない民衆の大きな負担とはなろう。しかしながら布施の意味するところが、多少とも所有する者は他人にこれを分かち与えて所有欲本能に制限を加えることであり宗教生活の基本であれば、布施を行うことは善であり又徳でもあり、分に応じて喜々としてこれを実行するのでもある。事実寺院の修復の爲野外映画を寺院内で行つているところに見学に行つた時、同行のユンバン氏も30リエールの喜捨を当然の如く行い、その他の民衆も別に強制されるわけでもないのに次々に喜捨を行つていた。これを世話役が奉加帳みたいなものに次々に記入して行き、そこに極めて自然な雰囲気の流れていた。その奉加帳には200リエール位から10リエール位まで種々な金額が記入してある「一体幾ら位するものか」ときいてみると「いくらでも多い方が良いが恥ずかしくないだけで良いのだ」といつて平然としている。毎日の托鉢も各地でみかけられるのであるが、この場合にも喜んでむしろ待ちかまえているように布施を行つているのを見ることが出来るのである。そして寺院の何かの行事でもあれば、老いも若きも嬉々として集り、頭の上に大きな皿をのせこれ

に布施の食物や菓子などを沢山入れて運んでくる。如何にも楽しそうな集いである。これ等のことから布施による経済的負担の重いことも推察は出来るが、しかしこれが農家生活を根本的に圧迫するものとは云えないであろうし、むしろ経済的負担よりもその様な布施により精神的な安定を求め、経済活動の部面に於ける資本の蓄積による拡大再生産の方向をとらしめない様な宗教倫理が大きく農村を支配していることこそ問題となるのではなからうか。

この僧侶及び寺院の果している社会的機能のうち見逃すことの出来ないのは、所謂寺小屋に於ける農村児童の初等教育を司っていることであろう。カンボディアの2,000校に近い小学校のうち約3分ノ2の1,500校近くが寺小屋であり、ここで僧侶を中心にして仏教に基く道徳律や文字の教育等が行われている。それで農村に於ても不思議にカンボディア文字の読める男の多いのに驚かされるが、しかしその教育内容の低さは屢々都市の学校へ出た場合等に指摘されるところであり³⁾、宗教教育に主眼のおかれていることは容易に想像出来るのである。そこでは真に近代的な科学的教育は行われていないのであり、又それが行われる筈もなく、大半の農村子弟がこの寺小屋教育だけを受けることを考えれば、確かに仏教の訓による平穩な農村社会秩序は保たれるであろうが、進んで発展的思考を持つ科学的な農村青年の育成は不可能であろうし、ひいては農村経済の停滞を余儀なからしめる一因ともなるのではなからうか。

ともあれこのように幼少時代より僧侶と寺院に親しみ、仏教的環境に深く育まれている農村社会では、その風俗・習慣・伝統もこの仏教の影響が強く反映していることも否定出来ない。例えば農村家族間に於ける長幼の序列がはつきりしていること、即ち我々を招じ入れた一大家族に子供がいるので贈物の氷砂糖の袋を与えようと思い父親に差出すと、その父親は子供には与えずに坐していた家長らしい祖父にまづ差出し、この祖父・祖母が最初にとり、次いで父親達大人の間を袋を廻し、それが済んで子供達に与えられたことを目撃して、当初は意に反して大人達が勝手なことをしているように思えたが、良くみれば極めて当然なことであり、子供よりも父親、父親よりも祖父即ち年長者の方が権威者であり、この年長者の絶対的な権威と、その権威に対する若年者の極めて謙虚な服従とによつて、家族の秩序が保たれてゆくのであろうことがわかり、認識を新にさせられたこともあつた。家族内でもそうであるように村では村長更には郡長と、権威者の仲裁ならば大概のもめごとは解決するとされている如く、権威に対しては時には盲従とも思われる位の敬虔服従の観念を持つことを知る。これも仏陀を尊ぶ宗教的な謙虚さと一脈通ずるものがあり、そこに於ける家長制的伝統を重んずる風習には、技術等の内発的革新性は余りみられず、むしろ技術の指導普及等には権威を背景にした強制こそ実を結ぶことが多いのではないかと考えられる。

食生活慣習でも仏教の影響を大きく受けているのではないかと思われる。都市以外では畜産物を食することは殆んどなく、淡水魚或は塩干魚等が主要な副食であり、これに庭先の野菜や香辛料を入れてカレーみたいに煮つめたもの等、その料理は中国料理やヴィエトナム料理にも似ている。しかし普通の農家では華僑の売りに来る魚を臼と杵をついた悪臭のあるものを喜んで購入して大事に甕に貯蔵したりしているので、極めて安価なお粗末なもので過していることが想像される。主食は何処に行つても米であり、これを土鍋みたいもので炊いて食べるが、主要な栄養はこの主食によつて摂取しているのではないかと思われる。時にはこれをうどんみたいに加工したものを食べている。彼等は食事を神聖なものとするので、我々の自炊の状況は物珍らしそうに眺めているが、いざ食事をはじめると皆散つて行く。そして彼等の食事の内容も、食事中に不意に訪れると著しく嫌悪の状を示し、仲々わからない。が、一般に食生活は極めて低く、自給自足を原則として調味料の塩や魚醬等を僅かに購入するに過ぎない。乾季になると一家中で或は村中で水溜りや沼に出かけて魚をとり、これを副食とすることも多い。

とにかく農村のあらゆる風俗・習慣・伝統は強く仏教の影響を受け、良きにつけ悪きにつけ農民の日常生活を規範づけていることは否定出来ない。

(1) 渡辺照広「仏教」(岩波書店昭和31年2月刊)

(2) ユンパン氏の話「カンボディア人が商売すると村の人は皆良くは云わない」

(3) プノンベン在住鈴木重成氏談「地球のまるいことすら殆んど知っているものはない」

なお「東南アジア政治経済総覧」及びグイ・ボレ、エヴリーヌ・マスベロ著 大岩、浅見訳「カンボディア民俗誌」(昭和19年生活社刊)等を参照した。

(ハ) 技術と諸制度及び組織

カンボディア農民の農業技術の段階は極めて遅れていることが屢々指摘されている。

例えばグランラック或はメコン河周辺の浮稲地帯では、乾季の終に1頭或は2頭だての黄牛で鋤耕し、これに種籾を撒播して、その後は洪水の増水と共に稲の生育するのを待ち、雨季の終に減水して稲が倒伏し、これから登熟期間を待つて収穫するのであり、その間に施肥・除草・薬剤撒布或は灌排水の調節等を行うことはなく、ただ自然の恵を待つというだけである。又苗代を作る地方でも、この灌漑水が不足する時には大きな木製のスプーン(写真参照)で水をかきあげて灌水する位で、多くの管理労働を費すものではない。その後も耕耘碎土かきした本田に挿秧田植を行つた後では、施肥・除草・薬剤撒布等の管理労働は殆んど行わないのが普通であり、収穫を待つだけである。

収穫には倒伏した稲をひきあげる為に、又とは反対側に長い彎曲した把をつけた特殊な鎌を用いて順次刈取り、これを集めて脱穀するのであるが、その脱穀も牛に踏ませて行ふ場合や、長方形の板に打ちつけて脱粒するのが普通であり、これを風選によつて調整して牛車に乗せて家に運ぶという、極めて幼稚簡単な方法に過ぎない。

とうもろこしの播種にしても、耕耘碎土を終えた後に棒で植穴をつけたところに2,3粒の種をまいて覆土するだけであり、収穫したとうもろこしは乾燥させた後、涼しい夜長を利用して手で脱粒するに過ぎない。

稲の品種にしても又他の作物にしてもその種類は極めて多く不統一であるが、それもその土地気候条件やその他の環境によく適合したものが選ばれて、その栽培時期栽培方法も長年月の経験と知識に基づいて最も良い方法が選ばれているのである。

この伝統的技術は全面的に否定するわけにはゆかないのであり、或る意味に於いては最も合理的な経営が行われているともいえるであろうし、技術の意味するところがその国民のその時代に有する自然力支配の程度を示すものだとすれば、確かに現在のカンボディアでは低度の自然力克服の段階にあることは否定出来ないものであり、従つて土地生産力も労働生産性も著しく低いであろう。しかしながらこのような低度の段階に止り、又とどめおかれたということは、今でこそ独立国カンボディアではあるが、長い間資本主義的植民地として特殊な地位に立たされていた国としては、それを編成秩序づけていたフランスの企業家そしてこれをバックアップした植民政策の結果として当然の帰結であつたともいえるであろう。

世界商品としての米に例をとれば、フランスは商業特に外国貿易に企業活動を行つていたのであり、端的に云えばその米の生産される過程や集荷される過程には全く無関心であり、これが如何に廉価に購入されて如何に高価に販売出来るかが最も関心事であるに過ぎない。そこに利潤獲得の余地を見出し投資の危険負担を行つていたに過ぎないといえるであろう。少くとも植民地獲得の初期に於てはそうであつたといえよう。そこでは何等農民の生産技術に対する考慮や、経営合理化への関心のあろう筈がない。集荷機構を華僑が握ろうとも何等の關係はなく、むしろこれ等機構を大いに利用することこそ必要であつたともいえよう。

それが次第に貿易額も拡大して年々一定額の産米をも確保しなければなくなるにつれて、より集荷範囲を拡大してより流通費用を軽減する必要からも、他の産業開発とも相俟つて輸送機関である道路鉄道への投資も行われて主要輸送路は完備されてきたのである。それと同時に米の豊凶の差を大きく開かせるものとして自然力特に水の多少が決定的な意味を持つていることから、これの制御即ち灌漑治水工事への投資をもはじめることとなつた。それもサイゴン米として西欧でも特に声価の高い南北ヴィエトナムに対して主として投資活動が盛んに行われて、カンボディアに対してはラオスよりも優るとはいえ第二義的なものに過ぎなかつたと思われる。バタンバンにその様な灌漑施設の行われたことが知られているが、その他計画中に終を告げたところも多い。しかしこれとても既成耕地に対する生産の安定灌漑施設の完備による集約化を進めるものよりも、むしろ耕境外にあつた土地への投資による外延的な耕作地拡張の方向をとつたのであつて、それは年々の生産量の増大が反収の増加によつて齎らされるよりも地積の拡張に基くものであることが統計の示すところで明らかな事とも一致するのである。これは勿論既成耕地の集約的利用を行うよりもむしろ耕地の拡大の方がより投資効果の大であることに基くからに外ならないのであり、それだけ安価な土地が豊富に存在することも意味する。従つて品種改良・施肥改善・土壌改良その他薬剤撒布除草等の管理技術その他栽培技術の改善等収穫増収的技術の導入への関心は薄く、これ等に注目されはじめたのがおくれたのは当然ともいえよう。そうかといつて労働過程の耕耘或は収穫調整等の労働節約合理化の技術への関心が示される筈はなく、生産費の低下は豊富低廉な労働力を利用し、これ等を低い生活水準に維持することによつて充分に果されるのであり、農家の生活の合理化生活程度の向上への努力が払われること等は到底あり得ないことでもある。

しかしながらこれも一定の段階に到達すれば、商品としての米の規格の統一も必要となり、優良品種の選抜淘汰による増収への関心も払われるようになり、次第に気象条件土壌条件等の調査研究と並んで米の試験場の設置等も行われ、米産地帯であるバタンバンには有名な *Station Génétique du Riz* の開設をもみているのである。その他の作物の試験研究も行われるとともに、流通機構が華僑に握られこの段階の占める費用が大であり農民の貧困が倍加されてゆくのを知り、信用組合協同組合の設置による流通段階の改善にも関心を示すようになってはいるが、その成果は充分にあげられたとはいえないのであり、僅かに生産技術の改善流通機構改革の方向をとつたに過ぎないものといえよう。そこでは依然として古い生産様式による伝統的技術の踏襲が一般的であつたことは否めない。

この様な事情にあつて多少注目されるのはとうもろこしの輸出商品としての優位性によつて、この品種改良栽培普及の要請に基き、著しく栽培面積を増加させ現金獲得の機会を与えたことであろうが、これも原住民の低廉な労賃を基礎としてその優位性を保つていたことはいうまでもない。

その他家畜の改良疾病の予防等も行われはじめたといふものの十分な成果をあげてはいえない。ともかく農民の側にも内発的な要求と知識に乏しく、労働過程の機械化も労働力の競争に及ばないし、又これ等購入資本の蓄積も貧窮化された農民にある筈もなく、特に収穫調整も水稻一毛作では跡作の為の時間的束縛もなくその為迅速さを特に必要とするわけでもないので、この機械化等が進む筈もないのである。それに一般工業技術の進歩も植民地の特殊性から全然これがみられず、電燈のつく街が数える程しかないという様な状態でもあり、高価な輸入製品を購入しなければならぬとすれば、購入肥料農薬等の投入等殆んど考えられないのであり、肥料は天然の洪水の運ぶ肥沃土と水田刈跡放牧による僅かの牛糞がその役割を果すに過ぎない状態で、農薬も宗教的な意味もあつて仲々使用したがないという様な事情もあり、

新技術の普及も仲々困難を伴うことが多い。ともあれ植民地社会を編成秩序づけてゆく主体者側にも生産技術改善への欲求に乏しく、又原住民の側にはこれを可能にする条件と内発的欲求に乏しいところから、必然的に技術の立遅れが齎らされたのであり、更にはこの様な後進的な状態こそフランス本国の要請していたところでもあるのである。それだからこそ又一方では高度に利潤獲得の余地さえあれば、広大な土地に莫大な資本を投下する典型的な資本主義的植民地農業であるゴム園経営を可能とする様な労働力条件をも生み出すことともなつたのである。

最後に独立国となつた現状と動向についてみてみると、一般原住民の生活慣習や生活程度、流通機構を華僑に握られていること、伝統的農業を営んでいること等は以前と殆んどかわらないし、又急激に変わり得るものではないであろう。しかし乍ら主権を恢復して独立国となつたことは、カンボディアの誰もがこれを喜びとしているのであり、有識者の間では積極的な国土開発農業開発等への意欲が極めて強いことも事実である。そうはいうもののこれを達成せしめる人材と資本の不足が決定的であり、これを多く外国に依存しなければならないのが現状でもある。だが機構制度的には徐々に改革されて一歩づつ目標達成への道を歩みつゝあることは否定出来ない。

例えば農業試験場でもフランス時代のあとをひきついだものではあるが、バットンパンの *Station Génétique du Riz* では日本の蓬来米をも母本として品種改良をやり、種々の試験研究育種も行つている。又その地方の稲作の共進会等もやつて優良粳の選定も行つている。そしてここで出来た優良品種は、バットンパンより17キロはなれた *Pilote Station du Riz* で栽培試験を行い、ここで優秀と認められたものを、普及品種として農家へも配布するとのことである。この *Pilote Station du Riz* では耕圃が2区にわけられ、各区300ヘクタール、合計600ヘクタールの所に、5月頃10日かかつて播種を行い、ヘクタール当り80キロの粳を撒播して、1,500キロの粳を収穫するとのこと、普通農家よりも収穫量は確かに多い。しかもこの耕耘その他皆アメリカ製の機械で行い、浮稲地帯の近代的機械化農業の可能性をみせつけられたが、この栽培方法が果して普及するかは問題があるが今後の開発地帯の課題とはなるであろう。ともかく僅かながらも品種改良等は行われつつあることを知る。カンダルの新しく出来た試験場分場の *Centre de Samrong Thom* では主としてとうもろこしの交配育種を行つているが、ここで出来た優良一代雑種の種子も農家にわけてやるとのことであつた。この農場も144ヘクタールの面積をもち、人工池を機械で構築したり、耕作は勿論アメリカ式機械により、又収穫脱粒も機械で行つている。土地は村の土地を借用しているので年間1,500リエールの借地料を支払つている。とうもろこしの外にもトマト・チャその他の蔬菜の試験も行つている。又 *Prek Leap* の試験場も46ヘクタールの土地にナス・キュウリ・スイカ・トマト・トウモロコシ・カボック・ヤシ・ヒマ・水稻・バナナ・ミカン等を栽培して、試験研究を行つている。ここは *l'École de l'Agriculture* でもあり、高校に行かない農村子弟を2年間で農業教育を行い、地方に帰し普及員等にしているらしい。しかしながらこれ等の試験場の研究員は各々数名に過ぎないので、十分な成果の挙げられていないのは当然であり、その成果も又普及事業が徹底していないので州に1,2名の普及員では如何とも為すことは出来ないであろう。このことはコンボンチャムの *Station Experimental Agricole à Chamcar-Krauch* の試験場でも270ヘクタールの土地にバナナ・カボック・マンゴー・サボチラ・牛乃乳・パイナップル・ミカン・ブドー・ランブータン・コーヒ一等を栽培し、又シエムレアップで灌漑試験をバナナ・ヤシ・ナス等に行つているところをみても同様であり、フランス時代から受け継いだ試験場をただ経営しているだけの実験農場の如き観を呈している。しかしこれ等の試験研究機関も活用の如何によつては、大いに成果もあがるものであり、今後の運営こそ再検討さるべきものと思われる。その他新しい作物の導入も

殆んどみられず、わずかにカンボットでココヤシ園を作るのだと云う青年達の開墾地をみかけた位である。土壤の調査も完全なものではなく、地質局を新設してここでフランス時代からの継続的調査を行つていただけで、未だ完備した体制も出来ていない。従つて土性改良等への関心もなく、施肥も試験場と華僑の近郊蔬菜園或はこしょう園等で行われているに過ぎない。しかし緑肥の栽培試験とローテーションも試験場で行われており、この普及のポスターも各地でみかけることは出来たが、これも美しい壁掛位の意味しか持たないのではないと思われる位に、その様な緑肥飼料草等の栽培をみることも出来なかつた。病虫害の予防技術等も全然普及していない。というより全く知られていないに近い位であり、わずかに蔬菜園で DDT を使用するだけといわれている。栽培技術の改良も先づ行われていないと云つてよい。しかし広大な土地の治水が最も必要となる関係上、作物の外部生育条件の改善として、治水灌漑には相当留意されて、アメリカの援助技術の導入によつて、最も遅れた地方であるシエムレアップにも **Baray Occidental Irrigation Project** の大灌漑工事も略々完成していた。これは自然の大池から水をひいて灌漑するようにしたものであり、すべてアメリカ製の機械と技術により短時日に出来たものであるが、とにかくその規模の大きさはこの地方では驚かされる。ともあれこれにより相当広大な面積が潤うことにはなり、産業開発に貢献するところは大きいであろう。これが外国資本と技術援助により行われていることには問題があるが、とにかくこの様な大規模の土木事業には思ひきつた処置がとられつつあるのである。それはプノンベン市長 **MEACH-KONN** 氏の発言にもある如く、「道路の新設等には何等の考慮も必要なく何処でも自由にこれを設定出来る」とされる如く、未開発地の多い環境条件を裏書きするものでもあろう。

その他一般工業技術の進歩等は遅々たるもので、戦後日本の技術者によりマッパ工場や印刷工場が動き出した程度だとみて良く、農業に必要な肥料・薬剤・農具・動力等皆輸入に依存しなければならぬ状態である。

農地に対する所有権は、登記制による登記所の確認により完全な権利が与えられることになっているが¹⁾、なお一定面積を一定期間内に開墾して作物を栽培すれば、その間の税金も免除されその土地も払下げられるという開墾の奨励も行われている。これは「占有者が5年間継続して平穏かつ善意の占有をした場合には所有者となる」²⁾ という宣言制に基くものと思われるが、これも将来は登記される土地であり土地管理事務所の統制下におかれている。とにかく現在なお土地の余裕のあることを示しているものといえよう。土地所有者は約70万人といわれているのであり、大半の土地が1~5ヘクタールの小土地所有の自作地であり、一般には大中土地所有者はなく、あつても極く少数の官吏や有力者上層の一部に過ぎないことはよく知られたところである。小作も行われぬわけではなく、その場合に分益小作も行われている場合もあつたが(コンボンスプー)、その数は限られたものである。

最後に農村の物資流通と協同組織の面にふれておこう。度々指摘されているように農村の必需品の販売及び生産物の購入はこれを華僑が握つていて、両面から利益を得ているのである。それは如何なる僻地に行つても華僑のいないところはないと思われる位に、どんな所にでも住みついている。附近に村落もない様な山奥の橋のたもとに2,3戸の家が建ち、ここに僅かな廉い商品例えば塩・煙草・魚醬・駄菓子等を並べていけば間違いなく華僑の店であり、ここに輸送途中の華僑のトラックが立寄つたりしているが、多くは附近の村落から原住民が出て来て必需品を購入するのであり、又原住民の余剰の農産物例えばバナナ一房置いたりして相互の交換所にもなるのであろう。そして又彼等が農産物の籾やカボック、或は椰子の葉で加工したごさみみたいな敷物等、あらゆる生産物の集荷を行つていて集荷販売の最先端となるのであろう。この様に奥地では村落地域外に居所をかまえているのが普通であり、時には直接村落まで売込み

に行くのであろう、その代金を回収したといつて400リエールも持ち帰っているのを見たこともある。その他地方の小さな道路沿いの街並をなしているところは、殆んど華僑であり、店舗を張つて商売をしている。大中都市は勿論彼等の商店や精米所等であり、都市の構成は小数の官庁や仏人官舎等の近代的建物を除けば、大半は華僑或は小数のヴィエトナム人等の建物であり、カンボディア人で都市の家屋に住む者は殆んどみられない。その都市のはずれか或は周辺に聚落をなして住んでいる。全く場所的に異なる位置に位しているのである。プノンベン周辺の村落で1戸だけ村落内に小さな店を持つ華僑がいたが、これは例外に属するのではないかと思われる。とにかくこの様な華僑が中央から地方の末端まで有機的な組織を持つて、商品の販売生産物の集荷を行つているのである。そしてその輸送機関である大型トラックや船舶も又全部彼等の組織下にあることはいふまでもない。そして彼等が又多く農村の高利貸的金融機関の役割を果しているのであり、対人信用による作物金融を行いその利率は月7~10%だとされている³⁾。その貸付資金は又中央の大商人からの月3%位の地方商人への融資によるものであり、勢い高利ともなる。にもかかわらず、凶作にも度々見舞われ且つ貯蓄性向も殆んどない又それを可能にする程の余裕もない等種々の理由もあつて、原住民は彼等から収穫までの流通生活資金を借用しなければならないことが度々であり、一度債務を負えばこの返済が殆んど不可能に近く、収穫時には生活するだけのものを除いて残り全部の糧を取上げられる例さえあるとされている⁴⁾。フォン・ベン氏の1952年推定によれば70万の土地所有者が一債権者について平均1,000リエールの借入債務を負い、全体では5億リエールの負債になるとされており、如何にその額の大きいかも推定出来る⁵⁾。その様な事情にもあるので、政府も信用事業に注目して、1950年には国民信用事務局を設置して、地方農業相互信用局に於ける業務の協力財政的援取を与えている。この地方農業相互信用局の前身は既に1929年にスパイリエンに創立されていて、会員特に農民及び農民の団体に対して、耕作上必要な資金や土地獲得の為の資金を貸付けるものであり、短期・中期・長期のものがあり夫々12%, 8%, 4%の利率とされている⁶⁾。しかしこれが1952年には7局5万名余りの会員を有するだけであり、まだ如何に組織が未熟であり業務の微々たることが推察出来よう。そして1951年末には事務局から地方局に対しては1,780万リエールの信用の開設が行われたに過ぎないとされているので⁷⁾、農民に対する融資の信用額を2億リエールとみれば、地方局の行う融資額は極めて僅かなものであり、今後の発展に俟つより外ないであろうし、順次組織化されてもゆくであろう。

この信用事業と並んで、生産流通面に於て極めて圧迫された劣弱な地位にある農家を組織して対処してゆくものに協同組合がある。これも既にフランス植民時代の末期に政策的考慮の払われてきたものであり、フランス人リュシアン・ル・クレム氏の建言により1937年にカンダル州に設立されたのをはじめとするが、1955年の農業協同組合数は14州中の11にあり、組合員数は4万人、資本金5千万リエールで、農業金融・共同販売・農業倉庫事業を主要事業内容とするものだとされている⁸⁾。しかし全農家を70万と見積つてもその加入組合員は1割にも満たず、大半の農家が未組織であることもわかる。そして既に組織されている様な農家よりもむしろ残されている農家の方にこそその必要は大きいのであり、今後の課題となるであろう。1956年毛沢東のカンボディア訪問以来合作社運動もとり入れられて、生産手段生活物資の共同購入や、生産物の共同販売体制も、政府当局により熱心に考えられつつあるので発展も期待されるのである。事実1957年3月合作社宛の各国商社入札も100万米ドルの多額におよび、順次発展の萌もみられつつある。我々の協同組合事業発展の強調に対しても、現地で賛成の意を表す当局者も多く、MEACH-KONN氏も同様であり「未だ発足間もないので組織運営等も未熟で揺籃期に過ぎないが、次第に充実拡充してゆくつもりである」と述べられ、その為にもチェッコの専門家

が指導に来ているとのことでもあつた。

とにかく政府の現在行っている大きな治水灌漑・道路の整備・水道・下水工事等の公共土木事業や、信用事業の育成或は協同組合活動の保護育成等、何れも植民地時代の末期にはフランスによりその必要を感じて手がけられてきたものでありその萌芽は既に存在していたものではあるが、現在なお一層その必要が痛感せられて独立政府自体もこの育成に尽力しているのであり、全く新しい秩序への方向を辿りつつあるものとも云えよう。

(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7) 何れも国際食糧農業協会 農林中央金庫「東南アジアの農業金融」(昭和31年8月)

(8) 河合恒氏前掲書

その他アガール著「仏領印度支那」イブ・アンリー「仏領印度支那の農業経済」等を参照

2. 農業生産の概況

カンボディアの貿易品目が殆んど農産物であり、そのうちでも米、とうもろこし、ゴムが主要な部分を占めていることは既に知つた。

実際の農業もこれ等の農産物を中心に作付けされているが、その中でも原住民によつて行われる水田稲作経営が主体であることはいうまでもない。(農作物の作付面積及び収量その他全体的な生産状況等は野中時雄氏前掲論文参照)。

次に各地で見聞した農家の生産概況の一端をみてみよう。

(1) 原住民の農業

カンボディア政府当局による農家粗収入概算をみると次の如くである¹⁾。

(a) メコン河流域の肥沃土壌地帯で、家族3人、牛2頭、農地3ヘクタール耕作農家の概況は、粳・赤とうもろこし・緑豆・蔬菜・果樹その他副業を合計して12,300リエール。

(b) 中央部水田地帯で、家族3人、牛2頭、農地3ヘクタールの農家が、粳、牧畜、その他の副業をあわせて10,900リエール。

(c) 東部赤土高原地帯で家族3人、牛2頭、農地3ヘクタールの農家が、緑豆・大豆・綿花その他副業も合計して13,000リエール。

この様に3ヘクタールも耕作しても一万リエールそこそこの粗収入しか挙げ得ないのであり、当時より多少貨幣価値が低下して生産物価格が騰貴しても、現在でもこの様な経営では2万リエールを超えることはないことが推定される。そして経営費をそれ程かけないとはいへ、農家の所得の低いことは想像出来る。

カンダル州の一農家チャム氏の概況をみよう。この農家はプノンペン南方のサイゴン街道沿いの沖積土壌の集約地帯にある。

家族はチャム氏(34才)の妻(34才)と、妻の家族と一緒に住んでいる。父(73才)、母(68才)長女(46才)、長男(40才)、二男(28才)、三女(23才)、チャム氏の子供1人、長女の子供3人、長男の子供1人の合計13人である。この家屋はカンボディアの普通の家とかわりなく床の高い家である。村人達が皆助け合つて作つてくれるんだそうで、約50年前に建てられたものという。チャム氏も金が出来たら一軒家を建てる予定だが、未だ妻の家族と一緒に同居しているとのことである。結婚した時に耕地を男も女もわけて貰うのだそうで、現在チャム氏は約1ヘクタールを耕作している。その他父の耕地が若干ある。長男・二男は現在プレイベンに働きに出ていて家にいない。

家畜は黄牛5頭・豚2頭・鶏10羽、農具は鋤1・耙1・鎌10・鋏5・牛車1その他鋸や篩や籠及び粳貯蔵場及びこれを入れるもの等若干、それに牛舎もある。大植物はマンゴ3本(父所有)・ココヤシ10本(1本1本所有者が異なる)バナナ30本(父所有)等である。パイナップル

も少し作っているが土産物程度に過ぎない。

チャム氏は4年前から他村で作っている蔬菜園の良いことを知り乾季に蔬菜畑4反余をつくりに、これを売却して4箇月で6,000リエールの粗収益をあげるといふ。ブノンベンの買手である華僑から3日おき位に手紙がきて、その必要量を直接自分で運搬して販売する。蔬菜はカブみたいなのとチシャみたいなのであるがはつきりわからない。彼がこの様な蔬菜園をはじめたのも、カンボディア人では珍しい部類に属するのであり、ブノンベン市に近く華僑の蔬菜園等もある環境条件と、彼自身が家畜の売買も行うという特殊な技術を持ち、経済打算的な考え方の所有者でもあるからだらう。家畜の売買は2頭で400~500リエールの儲けがあるそうで、牛の安いのは1頭1,200リエール位からあり、良い牛は2,500リエールはするそうだから、約一割の利益はある。しかし仲々儲からないといふ。

チャム氏の三反余りの水田からは、雨が多くて良く出来る年で400キロの籾しか出来ないのので、父の水田を合わせても米の自給が出来ないので、毎年1,000キロ以上の米約3,000リエールを購入しなければならない。とうもろこしが約950キロとれるが、これは全部売却して1,350リエールとなる。バナナは大半食用とするが、残りを売つて100リエール、マンゴも食用とした残りを多い時は400リエール少い時でも350リエール位売却する。パイナップルは以前に栽培したこともあるが、一箇1リエール位で採算があわないのでやめたとのことである。緑豆・大豆も作るが値が廉くてひきあわなどのことである。その他の大きな収入は、長男及び二男の労賃であり、夫々月に600リエール位は稼ぐ。それにしても日当20~30リエールで如何に低労賃かわかる。税金は1ヘクタール上田300・中田200・下田100リエール位だそうで、非常に高いといふ。この農家の農産物収入合計も1万リエールそこそこでそれ程大きくはないが、その中でも蔬菜収入は可成り大きな割合を占めている。しかしこれには野積みの牛糞を肥料としてやり、又薬剤もDDTを7キロ、80リエール使用して相当集約的な栽培の結果である。勿論水稻は無肥料である。その他の収入では家畜売買による儲けと、労賃収入が大きく、全体では2万リエール以上の総収入となるであらう。この家はカンボディアの農家のうちでは上の部に属するものと思われる。屋内も写真やポスター等で飾つてあり相当広く、家具調度も食器類も揃つている様に思われる。しかし家具調度は三女の娘が未婚なので見せてくれない。家の中には主人が入つて良いと云う時だけ入れるのであつて、娘のいる部屋などには決して入れないそうである。結婚には家の財産が重要性を持つので嫁入前の娘の財産を知られては困るということである。薪は村の共有の林に行つて自由に伐つてくる。又大きな池は商人が購入して魚を獲るが、小さな池は村人が一緒に行つて魚を獲り副食にするとのことである。とにかく生活費は極めて少なくて済むらしい。ブノンベ市内でも1人1日30リエールもあれば充分食べてゆけるし、又妻と子供3人の5人暮らしでも1日40リエール位でやつてゆける。大人2人に子供1人でも1日20リエールで済みます例もある。これから推しても農村ではいくらかかからぬであらう。それだからこそ、1日の日雇労賃が都市で40リエール、農村では20~30リエール、奥地に行けば10リエールでありこれで充分やつてゆけるのである。それがヴィエトナム人は60リエール、中国人は100~200リエールだとのことであり、これが客観的な能率給だとすれば、その労働の程度が知られよう。

チャム氏の母の家はすぐ近くにあり、そこに行こうといふのでついて行くと、家のすぐ横に一寸盛土がしてあり、父親が2年前に死んで埋めたところだといふ。その上は椰子の葉が重ねてあるが、ほこりだらけで一寸くぼんだ所もある。これを又掘り起して焼くんだとも云う。普通は火葬にして埋葬するのであり、その焼場の立派なのをブノンベン市で見だし、又地方の寺でもこれがあり、現実に焼きつつある所もみたが、時にはこの様な土葬もするのである。スト

ントレン州のチュロップ村では、白木の荒削りの箱ではあるが仲々立派な棺桶を使用していた。死者は大切に葬ららしい。村人が集つて手助けするところなど日本と余りかわりはない。

ともかくチャム氏はこの様にして農業を営み、比較的少い面積から相当高い収入をあげているのであつて、カンボディア人でも蔬菜経営でも行い得るし、集約的な農業を行い得る可能性を内抱していることを示すものであろう。とはいうもののこれは未だ例外に属するのであり、一般には水稻作を主として自給自足の農家が殆んどを占めていることにはかわりない。

コンボンチャムの一農家は家族4人黄牛2頭を所有して、4ヘクタールの耕地を耕し、籾3,600キロを収穫してこれが主たる収入源となつている。勿論肥料も農薬も使用しない。又同じカンダルでもブノンベン北方の一農家では、7人家族で3ヘクタールの耕地を有し、3,000~3,600キロの籾を生産して自給し、現金収入は道路修理の労賃（1日25~30リエール）収入や、椰子の葉の敷物（1枚3リエールで販売）を副業に編んで現金収入を得ている。このような農家が一般の農家であり、米作を主体として、家内工業の織物や、コンボンチャム・コンボンズプー・カンボット等の様に椰子砂糖を副業に作り現金収入を得ている。

カンボディアでは小作関係は余りみられないが、ユンパン氏の場合は2ヘクタールの土地を貸付けて、これから毎年150~120タン（約3,000~2,500キロ）の籾の収量があり、これを小作人と半わけにするとのことである。しかしこの様な例は少くその他の場合は2割5分以上の小作料は少いとされている²⁾。水田の売買価格約1万リエールであるが集約度の低い従つて地代も低い土地所有者となるよりも、更に高利潤をあげ得る余地のある商企業その他に資本が投ぜられるのは当然であり、農民自身に資本の蓄積もなく大土地所有も発生しない一因でもあろう。ユンパン氏その他の農家の事例でも大凡1ヘクタール当り1,500~1,000キロの籾の収量では、反当に換算しても玄米8~5斗に過ぎないのであり、如何に生産力の低いかかわかる。これも技術の発展段階の低いことが大いに原因しているのであつて、少くともその生産力向上の技術的可能性は大いに残されているといえよう。米作に限らずその他の作物でも同様であらう。

(1)(2) 河合恒氏前掲書

(2) プランテーション農業

カンボディアに於ける植民地農業としてフランスがその力を注いだのはゴム栽培だけと云つても良く、スノール・ミモット・チュップ・コンボントムにかけて実に3万ヘクタールに及ぶ大きな面積をゴム園企業農場としているのであり、20~30年生のゴムが見渡す限りこんもりとした森林をなして続いているのは実に見事なものである。このゴム園の中を自動車道路がクラチエの方へ通つているのであるが、長いところは16キロ短かくても4.5キロの間ゴムだけが道路の両側にみられるのであり、奥行は起伏もあつて何処まで続くかと思われる位であり、如何にその規模の大きいか推察出来る。この約10米間隔に整然と植樹されたゴム樹には採液の為の碗を置き現在採液中のものが多い。

このゴム園企業を可能にしたのは、云うまでもなく広大な土地しかも肥沃なテールルージュ地帯が廉くて入手出来、その上廉い豊富な原住民労働者を雇い得るといふ様な条件を持つからに外ならないが、一度採液樹令に達すれば、毎日恒常的な生産量を何十年かにわたり続けることが出来るのであり、工業生産の流れ作業にも似てただこれを採集する労働者の確保さえ出来れば充分な生産をあげ得るといふ好条件もあることが考えられる。ともかく世界的なゴム工業の発達と併行して、その需要の増大とともに拡張されてきたのであることはいふまでもない。

それはともかくかかる成園となるまでには莫大な資本も投下されているのは当然であり、先進国フランス資本に於てはじめて成し遂げることが出来たのもあろう。

現在人造ゴムの異常な進歩にも拘わらず、依然として既成園周辺のジャングル地帯をきり開いて、抜根焼却しながらゴム園の拡張を行いつつあり、又老園もこれを伐採して樹木の更新を行いつつあるのであり、未だ芽接を行つて間もない若園も相当広く存在していたので、益々強気で栽培を行いつつあることが窺える。

これ等ゴム園の管理では特に労働が手労働を主としている関係上労働者の管理には留意されていて、立派な宿舎は勿論各種の厚生娯楽施設も完備しており、立派な教会までもゴム園の中に建てられている。しかしこの労働者もヴィエトナム人が相当入つているともきくのであり、カンボディア人の怠惰の為か或はその様な労働を好まぬ為か、とにかく問題はあろう。この管理者は宏荘な建物を持ち、プールその他の娯楽設備も備え、又飛行場もあつて、気軽に軽飛行機で何処でも出かけることが出来る様な生活をしている。又その様な報酬を受けるのも当然かも知れない。これ等ゴム園の周辺には又バナナ・マンゴ・パイナップル等の植付けられた相当広い地域もみられるが、同じ企業採算による試みか、或は労働者の自給の為の果物かわからない。

ともかくテールルージュ地帯はゴム園にか或はバナナ等の果樹園として開墾し尽されつつあり、この肥沃土壌地帯の残余の部分は残り少なくなりつつあることが窺える。

(3) 華僑の農業

新しい天地を求めてカンボディアに渡来してきた中国人の歴史は古く、既にフランスの領有前にグランラックの漁業権を得ている一例をみても、これが頷ける。彼等はその出身地に依つて夫々福建・広東・潮州・海南・客家等々の幫的秩序を維持して活躍しているのであり、その商才は遺憾なく発揮されて、カンボディア各地で流通機構を完全に支配するまでに至つていふことには既に触れた。しかしながら彼等の中でもその数は多くはないであろうが、農業に従事しているものも多少はみられるのである。

農業とはいえ彼等の行う農業は、カンボディア人の行う米作主体の農業とは全く異り、都市周辺の蔬菜園・果樹園・花卉園等の園芸であるか、或はこしょう園・コーヒー園・ゴム園の企業的耕作を主としているのである。

プノンベン周辺では潮州系華僑の蔬菜園をみたが、その耕圃は決して大きいものではなく、せいぜい1ヘクタール内外或はそれ以下の経営であり、ここでキャベツ・花野菜・人蔘・カンラン・チシャみたいな作物を、極めて労働集約的な耕作によつて栽培している。

乾季には乾燥が甚しいのでその灌水の労力は極めて莫大なものであり、一坪に対して大型の桶で2杯を日に2回位の割合で灌水するらしい。この灌水桶も簡単なが細工がしてあり、てんびんでかつぐその労働の状態は、非常に熱心なものであつて、これでこそ中国人の成功も当然であるということを感じさせられる。フランス製の薬剤も使用しているし、化学肥料等も使用するらしい。そしてこの蔬菜園には乾燥を防ぐ被陰の為か、或は将来の果樹園化を試みる為か、それともより集約的な土地利用の為か、ミカンその他の果樹も規則正しく植えられている。この様な蔬菜は市場では他の物価に較べて非常に高価に販売されているのであり（物価参照）、例えば豚肉100匁と拳位のキャベツか或は小さな輪ゴム位の東のワケギみたいなものが同価格となつており、彼等の収入は莫大なものであろうと想像されるのである。とにかく新鮮な蔬菜は欧風料理や支那料理に対して需要は多く、又果物の需要も多い。従つて小面積の集約的な利用によつて充分採算はとれるのである。

バツタンバン周辺は又米と並んでミカンの産地としても有名であるが、これも華僑の経営によるものが多い。このミカン園も訪れてみたが、一農家では3ヘクタールの土地に1,000本の柑橘を植え、而も灌漑設備もセメント作りの立派なものである。その繁殖は取木に依るもので

あり、焼灰・鶏糞・厩肥・人糞尿等も肥料として施し、栽培技術も進んでいる。これから毎年20万リエールの粗収益があがると聞いたのには驚く。この柑橘園は一朝にして出来たものではなく、既に開拓者は故人となり、柑橘園の中にその功績をたたえるかの如き立派な墓が作られている。この墓に私は大いに興味を持ったのであるが、一度外地に渡れば其処に骨を埋める覚悟で事業に精励してやがてはその土となる、そこにオーバーシーチャイニーズの根強さがあると改めて認識を新にした次第である。

カンポット地方は華僑の方が多く、全人口のうちカンボディア人よりも華僑の方が多い特異な州であり、海岸を有しているので中国からの渡来も早く、商業・漁業・製塩業等の製造業に従事する者も多いが、農業に従事する者も比較的多いのである。そのうちカンポットからレアムに行く途中で華僑のゴム園をみた。テールルージュ地帯程ではないにしても立派なゴム園である。ここも親の代からのゴム園であるが、約4ヘクタールの土地に1,010本の木が植えてあり、密植の感じを受ける。虫害は老木に少し出るが若木には全然ないと云っている。ここに中国人家族3戸及びカンボディア人一家族が働いている。それは経営者も労働に従事するのであつて家族経営を少し広げた規模に過ぎない。採取した生ゴムを精製して商品とする過程を小さな家屋の中で行っている。年間製品として3,000キロ位出せるらしいが、価格の高低はあるとはいえ1キロ23リエール位で売却されるので、年間7万リエール以上の売上げは可能である。ゴム企業農園としては小規模ではあるが、同面積の水田等に比較すれば遙かに高い利益をあげているものと思われる。経営主は更にこしょう園も経営して、既に1年5ヶ月を経たものと、現在5ヶ月を経た二圃を持つていて、前者は既に花盛りであと5ヶ月経てば実を収穫出来るという。必ずしも良好な土壌とは思えないが、こしょうの値上りにより開墾して作付けたものである。

この海岸地帯やタケオはこしょうの栽培地として有名であるが、福建出身華僑のこしょう園も訪れた。ここでは既に3米以上のものびたこしょうが実をつけている。畦幅2メートルに株間1.5メートルの間隔で整然と植付けられており、立派な支柱を立ててこしょうの披条は一々丁寧に支柱に緊縛されている。この労働だけでも相当なものであろう。そして実をつみとる作業も手労働であり、労働集約的な経営であることを知る。家族経営であるが労働者も時には雇うのであろう。2ヘクタールのこしょう園からの年間売上は3万リエールという。

この地区では華僑の営むコーヒー園もあり、やはり小規模ではあるが苗木も育成中であり、更に拡張の意思も持つているのである。バナナを被蔭樹としているが、栽培技術等は劣るものと思われる。

このケップの海岸地方の水田では階段状のものもみられ区劃も小さく、裏作としてきゅうり・とうもろこし・いんげん等を作っているのがみられるが、休閑田も雑草が生えていて、他の地区の乾田とは趣を異にしている。これも華僑の水田が多く、近くで働いているものもみかける。水田耕作でも原住民とは異なるのを知つたのである。

とにかく華僑の営む農業は、経済的作物を栽培して極めて労働集約的であり、且つ収益も高いことを知ることが出来た。

ヴィエトナム人も又国境近くの水田地帯か、或はバツタンバン等の果樹園で柑橘・バナナ・マンゴ・サボジラ・カシュウナツ等を栽培していて、華僑に準ずる労働集約的な経営を行い、カンボディア人の一般的農業と異なるのである。

(4) 山嶽民族の農業

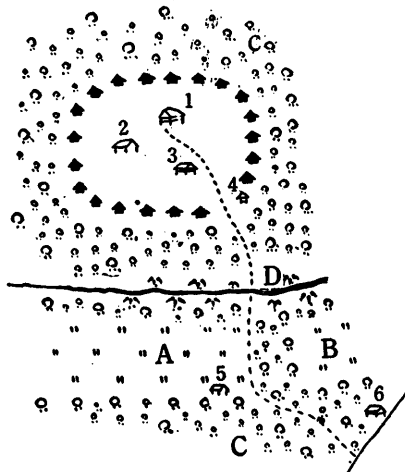
カンボディアの山嶽地帯には肥沃な平原地帯を追われたインド系或はインドネシア系の少数民族が、原始的な生活を営みながら焼畑耕作や牧畜に従事していることが知られている。これ等小

数民族は山に住むのでカンボディア人はブノン族と一括して称しているが、その実情についてブノンペンで柔道教師に招かれている森岡氏からいろいろ教示を受け注意もきかされていた。又鹿島貿易の駒井氏に紹介を受けたクラチエの区紅雄氏も狩猟に出かけられるのでこの実情をきくことが出来た。

これ等ブノン族の生態に一度触れてみたい希望を前から持つていたが、それが偶然の機会にやつてきた。3月17日最北の州ストントレンの中心地ストントレンを発つて、ジープでなければ行けないという周囲の反対を押しきつて、ゆけるところまでゆくつもりでヴェンサイへのジャングルの中の道を行く。途中では象の通り道になっているのであろう、木が押し倒されて糞等の落されている所もあり、又野鶏やリスそれに大きなタカみたいな鳥も度々みかける。57キロ東方に走つたところでスレボク河に達したが、これを渡つた向い側が急坂で雨がりのせいでもあつてどうしても上れない。そこで自動車の保護の為にも引かえすことにして前途の調査を断念する。ここで一泊することにして附近の農家の調査をやることにしたが、早速一人の男が一緒につれてゆくというので再び20キロ引返してチュロップ村の入口にさしかかつたところで再び自動車が水田の中に入り動けなくなる。その村にいたカンボディアの兵隊で仏語を話す男がいて、いろいろ手伝つてくれて住民の手助けもあり自動車はやつと動くことが出来た。彼からブノン族が近くに住んでいることをきき、我々が行きたい希望を述べると、今日の案内人が良く知つているというので彼に案内を依頼して貰い、明日一諸に行くというので夜道をひきかえして、スレボクで一泊。翌日案内のリー君と彼の弟と一緒に作日のチュロップ村に昼過ぎに着く。この村長の家で昼食をとり、午後二時過ぎに前からクラチエで用意しておいた原地煙草・塩・マッチ・氷砂糖等の贈物の品を持って出かける。リー君が先に立つて歩くが山道にも馴れたもので実に足が早い。早速ジャングルの中の小径にさしかかる。この入口も我々では一寸見過しそうなところにある。それからジャングルの中の上り坂を歩く。初めての経験ではあり、全く昼なお暗い湿気を帯びたジャングルの中は可成り涼しい様に感ぜられる。ジャングルといつても人の通るだけの道は出来ているので、それ程歩き難いものではないが、途中で悪木が道に横だおしにたおれていたり、てんぎょう植物に足をとられそうになつたり、頭を打つたりすることは屢々である。5キロの道のりだときいているので、たいして気にもとめず、足早のリー君について未開の民族を見る期待に自然と歩調も速くなる。途中で一ヶ所水の流れのいるところに小屋がけしてあるところもあり、そこには炊飯の跡らしい石の黒くなつたところもあつた。ジャングル内の坂を上りつめたのか、それからは次第に道が平となる。もう近いという。しばらく行くと小径のすぐ側に屋根を葺いた小さな脚の高い小屋に大きな麻袋の積んであるのに出会う。これが糶の貯蔵だとリー君が教えてくれる。愈々近付いたことを感じとる。それから少し行つて今迄とは又更に違つて道とも云えないような道に折れ曲る。この附近は平坦である。先頭のリー君の後につづくと急に視野が開けた。それもその筈今までとはうつつかわつて約70~80メートル幅でずつと左の向うまで森林がひらかれている。これが恐らく耕地とされるのであろうが、未だ灌木が可成り繁つている。この向うが彼等の住む部落だというので勇を鼓して歩きはじめる。しかし未だ家も何もみえない。このひらかれた所を横ぎると又ジャングルだ。しかしすぐ3米幅の綺麗な小川にさしかかる。ここは木ぎれ等で多少せきとめられて人の手が加えられている。これを渡つた頃から遠くの方で弦楽器の低音部でも奏でる様な何とも云えない旋律が聞えてくる。我々の接近を知らせてでもいるかのようで一寸無気味な感じがしないでもない。これを5,60メートル歩いたであろうかその音も段々激しくなり部落の入口にさしかかる。リー君が先頭に立ちなれなれしく愛嬌をふりまくように入つて行く。これに続く我々を男達が怪訝そうな面持で迎える。部落の家はカンボディアで見馴れた床の高い椰子の

葉で葺いたもので大差はない。ただ床が小々高いのと、階段を上つたところが直接室ではなくて、臼等を置いた屋根のない作業場みたいなところがあるだけである。それ等の家に周囲をぐるりととりかこまれた、中央の集会所みたいな低い家屋にリー君がさつさつと上つて行くので、それに続いて上る。部落の半裸の男達もぞろぞろついて上ってくる。こうして出発以来、1時間半を費して3時半頃やつと着いたのである。正面に我々がすわると皆手を合わせてカンボディアの挨拶をする。皆善良そうである。リー君が何やら日本人だということを説明していると、彼等も感心した様に歓迎の表情をする。早速贈物の品々をリー君の云うまゝに酋長らしい精悍な男に差出すと、一まうなづいて受取る。他の男達は別に手を出して欲しがらる様子はない。儀礼として酋長が物を貰う秩序が出来ているのであろう。早速目的の写真を撮ろうと思ひリー君にその旨伝えて貰う。別に嫌がる様子もなく皆並んでくれる。男達の体格は実に素晴らしい。顔立ちも仲々立派であり、背丈も我々とかわりない。若い男は頭に白や赤の衣を鉢巻みたいに巻きつけている。耳タブには大きな穴があげられて象牙や赤い衣等が思い思いにつめられている。そして首には赤・紫・黄色様々の色をしたガラス玉の首飾を何本かつけている。後で知つたのであるがこの首飾も1本5~10リエール位で華僑の店で売つている。そしてふんどしをつけている。年長者になると耳飾りもなく大きな穴があいたまゝになつていて、首飾りもしていない。若い女(多分未婚であろう)は、頭髪を束ねて丸く後でくりその上に美しい櫛等をさしている。耳飾と首輪は男と同様であるが、半袖の上衣と下は腰巻みたいなサロンをはいている。美しい腕輪を手首に何本かしているのが特徴でもあり仲々美しい。子供でも女は腕輪をしている。既婚婦人は上半身裸で乳房も出している。腕輪もつけていない。耳飾は地味なものをつけて、裸の子供を腰の所で横抱きにしたりしている。足は勿論跣足である。

第1図 山嶽民族(クイ)の集落



- 1 部落中央の集会所
- 2 銅楽器のつるしてある小屋
- 3 贈物をわけていた小屋
- 4 建ちかけの家
- 5 番小屋らしい小さい建物
- 6 籾のおいてある小屋
- A 伐採跡地
- B 帰途にみた焼畑地らしい所
- C 密林地帯
- D 竹藪と小川

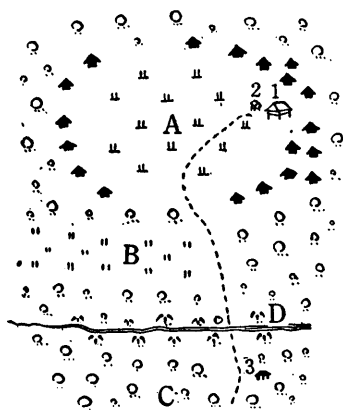
家は集会所を中心に20戸それに半ば建てかけの家1戸とが円周上に建ち並んでいる。その外大小様々の銅板(これが遠くからきこえてきた楽器であり木ギョのバチみたいなもので叩いて音を出す)を天井からつるしておく小屋が1つ、それに床の低い小屋が1つ。ここで酋長が与えた贈物を各戸に等分にわけていられしく、夫々盛りわけしており、その前でガヤガヤ云々順番を待っている。中には貰つたものを大事そうに抱えて大喜びしているものもいる。附近には鶏が放ち飼いらしく餌をあさつている。豚も同様である。黄牛もいて牛車もある。各戸の女達は木の臼に籾を入れて長い棒で2人でついている。家の軒には乾肉がつるし柿の様に干してある。これが副食ともなるのであろう。土甕も置いてあり、酒等も作つている。我々の持ち物は何でも珍らしいらしくて、酋長のいない所でいろいろ欲しがらる。写真のフィルムの空箱や銀紙等も貰つて良いかという様な顔をする。それ等は良いとしてもカメラまで欲しがられたのは弱る。こちら彼等の持つてゐるひょうたんの水筒を貰おうと思うが仲々くれない。彼等手作の細い彫刻のある竹製のキセルをくれというので、酋長がみて5リエール出せというのでそれを買ふ。又他の男のキセルを所望するとこれも酋長がみて

5リエールという。金を出すことを知ると別の男がひょうたんを持つてくる。これも酋長が10リエールと値をつける。その金は直接持主に渡す。美しい彫刻をしたキセルをどうしても売らない若者を酋長が怒りつけたりした。その様な私物に対する売却にまで酋長の権限が及ぶのか、或は貨幣価値を酋長が良く知っているので、彼等を保護する為の高価な値段をつけるのかわからない。とにかく酋長を中心に秩序が保たれている。写真を撮したりその様なことをして夢中で2時間を過し、既に日はかげりはじめて5時半頃となつたので、宿泊を奨められたが予定通り帰ることにする。既に夕食の準備であろう煙も各家から立ち上り、若者達は又銅板を叩きはじめる。皆と別れの手をふりながら名残を惜しんでもときた道を帰途につく。小川の所で前のハナ緒が内側についた手作りの下駄を失敬する。夫婦ものらしい二人にも会う。いつまでも銅板をたたく美しい旋律が後を追つてくれる。前とは異なる畑地をも一寸みかける。途中のジャングル内で既に日は落ちて一寸先もみえない真黒闇となり、僅かに持つていた豆懐中電燈の小さな明をたよりに、幾度か道を迷いかけながら6時半頃無事に麓に着くことが出来た。この地方に住んでいるのはクイ (Koui) だと区紅雄氏が云うが正確なことはわからない。

2回目の機会はクラチエ東方50キロの山中である。この時は区紅雄氏のドライバーである、ルーバン氏が案内に立つてくれた。この時もジープでなければ無理だと云われたのをおして出かけたのであるが、途中の道が極めて悪路であり、難行を続けた。カンプロランに行くというアメリカのプロテスタントの宣教師 (THOMPSON, C. E) に会い、この附近にいるのはムノン (Mnong Preh) だと彼が教えてくれる。牛車だけ通る疎林地帯の小道を進んで5キロ行つて自動車かぬかるみに入つて動かなくなる。ここに丁度象に乗つた旧式の鉄砲を持つた男と従者らしい男の来るのに会つて、彼等がムノンの男であることを知る。この象に押して貰つて進むが、いくらも行かないうちに又泥土にはまつて動かなくなる。川に橋がなくとも先に進むことが出来ないことを知り、後6キロを歩いて行くことにする。荷物 (贈物等) を象の背に持つて貰い象と前後しながら疎林或は草原を1時間位で歩いて、めざまムノンの部落に達する。部落の入口には小さな祠があつて雌雄のたぬきの様だが遠くではつきりしない。この入口も竹藪があつて水が流れている。新しく木の伐り倒した所もあるがこれから畑か水田にでもするのであろう。一寸したジャングルで土が肥えていそうに思える。そこを突き抜けるとすぐ広々とした水田になつている。刈跡だけがみられる。この水田を中央にして周囲に20戸位家が建つている。やはり床の高い家である。朝早く出発してようやく5時半頃に到着したのでいそいで写真をとる。男達の中には耳に大きな穴をあけている老人やふんどしの者もいるが、大半が耳飾や首飾や腕輪などはつけていない上に、シャツやサロンを着て少々俗化している。女もサロンをはいたり、シャツを着込んでいてカンボディア人と余りかわらない。農具は全部木製であるが、スキヤハロー等もあり、黄牛も飼育している。豚は放し飼いだ、鶏は鶏舎も作られている。弓はひき弓でなく、中央が固定した木の台になつていてこれに矢をのせ、弦を引いてひきがねにとめ、狙い打ちをする様式である。家屋周辺にはバナナ・キャッサバなども植えてある。我々の途中で会つた象に乗つた男が酋長であるらしく、彼の家に案内される。象が彼の大きな財産でもあり、部落でただ1頭しかいない。夕食を食べて行けというので彼の家に上りこむ。テラスみたいな所もあり、その側に炊事場があつてここで鍋等があり煮炊きするらしい。臼や杵ぎる等は日本のものとかわりなく、背負い籠等も竹製で精巧な作りである。鶏をつぶすから25リエール出せという。貨幣価値も知つている。酒を所望すると甕を持ち出しこれに酋長が細い竹の管を突込んで試飲している。竹の先が節になつていてそのすぐ上に穴があげられ、ここから酒が管を通つて上つてくるようになつている。我々にも飲めというので、それを借りて口をつけたが蒸溜されたウイスキーに良く似て、非常に口ざわりが良い。甕の中には穀殻が

一ぱいつまっているが竹の管で酒だけ口に入るようにうまく出来ている。一寸濃すぎるのか酋長は水を持ってきて薄めていた。暗くなつたので椰子の葉のたいまつをとぼしてくれる。7時頃夕食が出来てくる。大きな皿に白飯が山盛り盛つてある。鶏は塩炊きで野菜も何も入っていない。それと山芋と魚をすりつぶした様なものが出る。皆仲々うまい。食事は我々三人と酋長だけが一緒に摂る。その間中5、6人の男達がすぐ側で銅板を持ってそれぞれ打ち鳴らし乍ら踊り廻っている。酒は酋長の外の男達は皆ぐいぐい飲むが、酋長夫人も平気で飲む。家の中には野牛や鹿の角等もかけてある。この屋内は広い居間みたいな部分もあるが、個人の各室はきつちり区切られていて、アパートの各部屋みたいであり、仲々広い。ここで貰つた物は亀の甲と種籾位のもので、酒代30リエール、たいまつ2リエール、竹籠50リエール、象の後押賃150リエールをとられる。夜は泊つて行けというのを無理に象を出して貰い、9時半頃にひきかえす。直接テラスから象の背に乗り夜道を帰る。12時頃までは象も自動車を押して活躍してくれたが、遂に象の休息と共に我々も野営を決意して自動車内に1泊、翌朝ようやく象に押して貰つて大きな道までたどりつき、午後クラチエに帰りつくことが出来た。この部落は多少周辺市場との接触もあるらしく、皆貨幣価値を知つて自分で値段をきめてくるし、衣類等もカンボディア人と殆んどかわりない。それに水田も耕作している。ストントレンのジャングル中のクイ（区紅雄氏談）と較べると、この地方は疎林地帯でもありはるかに開けている感じを受けた。ともかくこの様な種族も僅かながら山中に住んでいるのである。

第2図 山嶽民族（ムノン）の集落



- 1 酋長の大きな家
- 2 酋長の家の鶏舎
- 3 村の入口のホコラ
- A 水田
- B 伐採跡地
- C 疎林地帯
- D 竹藪と小川

わりない。それに水田も耕作している。ストントレンのジャングル中のクイ（区紅雄氏談）と較べると、この地方は疎林地帯でもありはるかに開けている感じを受けた。ともかくこの様な種族も僅かながら山中に住んでいるのである。

あ と が き

この簡単な調査報告を終るにあたり、それでは今日かかる近代社会の経験知識にも遅れて独立した新しい国カンボディアでは、未だその精神的な面でも又物質的な面でも近代社会に適応性を有せず、永久的に後進国として立遅れをとりもどせないかということを考えてみよう。

確かに未だ三年前にやつと司法権・警察権・軍事権等を自らの手に掌握し、政治的独立をなしとげたばかりであつて、近代社会への精神革命も未だしの感はある。しかしながらこの近代社会への主体的形成は絶対的に望まないのかといえば、そうではなくて、何れかわり得ることは間違いない。現に自覚した人々も小数ながらあらわれていることはこれを裏づけるものとみてもよからう。

そうだとすれば、結局植民地経済から解放され、政治的独立をなしとげたとはいうものの、眞の民族的独立を裏付ける経済的独立がなしとげられるかどうかが残された大きな問題とならう。

長い間植民地的収奪を受け、華僑資本の圧迫を受けていた結果は、民族資本皆無という現象を呈せざるを得ないのはいうまでもないことであろうし、カンボディアこそ將にこの典型といえるかもしれない。従つて諸製造工業の発達、ひいては農業その他諸生産力の向上、国民生活水準の向上等所謂近代的発展が、現在の自力だけでは容易に達成出来難いであろうことは、これ又自明のことでもある。そして民間商業ベースによる投資も現状勢では仲々困難な要因が多い。そこでは結局国家による外資の導入に依存せざるを得ない面も多いこととなる。事実フラ

ンス・アメリカのみならず、中共・ソ連その他の先進諸国からも援助を受けて、どうにか近代国家への道を一步ふみ出そうとしているのである。しかしながらそれ等は、何れにしろそれ相当の目的を有する援助であることは間違いないのであり、そこに曾つてのフランスの植民政略程ではないにしても、これが形をかえた形態に於て外国先進国の権益の入りこむ余地がないとはいえない。否、むしろ後進国の経済開発こそ先進諸国のとらざるを得ない必然的帰結でもあり、今後益々後進国開発の名のもとにあらゆる経済的的政治的手段がとられるであろうことは容易に想像出来る。

かかる事情のもとでは、確かに植民政略からの脱皮は行われたとはいえ、真の経済的独立の基礎の上に立つ真の政治的民族的独立の達成されることは、現状では中々困難な問題が多いといわねばならないであろう。そしてこの解決の方向や手段は又いろいろ考えられるであろうが、事実多少は既に触れたごとく、単に先進諸国の歩んできた発展段階を追従して進むのではなく、新しい秩序の形成を求めて主体的な動きがあるのである。この動向は決して無視出来るものではなく、何れは拡大発展を遂げてゆき新しい経済体制を確立するであろう。

しかし何れにしてもかかる困難な社会経済状況下には、自立経済民族独立をなし遂げようとしているのがカンボディアでもある。同じアジアの一角に位している私どもは、この新しい国の前途をあたたかい眼で見守りたいというのが、調査を通して痛感したいつわらぬ感情でもあつた。

主な参考文献

(32. 12)

- (1) 移住局第2課 後藤連一「カンボディア農業瞥見」(昭和31年3月)
- (2) // 「仏印資源調査団顛末記」(昭和31年8月)
- (3) // 「中共のカンボディア経済援助」
- (4) // 「カンボディア移住問題」(昭和31年7月)
- (5) 移住局第2課「カンボディア移住問題について」(昭和31年1月)
- (6) 移住局「カンボディア調査報告」(昭和31年6月)
- (7) 江口康雄氏「カンボディア国農事改善要綱」(昭和31年6月)
- (8) アジア局第3課「1955年のインドシナ」(昭和31年1月)
- (9) アジア協会「カンボディア国家建設2ヶ年計画」(昭和31年3月)
- (10) アジア協会「東南アジアの一般情勢」(社会思想編)
- (11) ジャコビー著井上・滝川訳「東南アジアの農業不安」(昭和32年9月)
- (12) シャルル・ロブカーン著 松岡・岡田訳「仏印経済発展論」(昭和30年9月)
- (13) 日本外政学会出版局編「東南アジア」(昭和31年4月)
- (14) 農林省南方資源調査室編「仏印の農林資源」(昭和17年7月)
- (15) その他註記著書論文

附 1

保健衛生関係について

カンボディアの衛生状況については、厚生省公衆衛生局防疫課金光技官の報告がある(カンボディア調査報告・昭和31年6月移住局刊)ので、まず同技官報告により概況をみよう。

疾病の発生で最も多いのはマラリヤ、次いでアメーバ赤痢、トラホーム、レブラ、その他の伝染性疾患としてはペストがあるとされている。

マラリヤの発生地域は大体全土に亘つていとみてよいが、地域的或は局地的にその発生の多少はみられる。大まかに云えば、水田地帯には少く山嶽地帯に多く、都市に少く田舎に多いことは常識ともなつている。首都プノンペンでは非常に少いとされているが、それでも10%~15%位はみられるのであり、新しい感染は非常に少いが、マラリヤの媒介蚊が絶滅されてい

るわけではなく、やはりいることはいる。その他バタンバンやコンポンチナン等の都会では非常に少いとされている。これがキャンブローランの山嶽地帯になると皆感染していて、数十人の検査の結果も70～80%は原虫を持っている。クラチエ及びストントレン山嶽地帯も大体40～70%、グランラック西南でも50%は原虫を持っていて、大概の者が既感染者である。従つてカンボディア人は老令者が少く若死するものが多いが、この死亡原因も正確な統計は実施されていないというものの、マラリヤによるものが最も多いとされている。そこでカンボディア衛生省もフランス人を顧問としてマラリヤ対策を行い可成りの成果をあげている。即ちタケオでは最近までは70～80%まであつたものが、モデル指定地区として実施した結果30%以下に減少した。又スノール地区をマラリヤの特別対策地区として指定して対策を講じた結果多い所はまだ70%～80%であるが、若干少くなつて30%～40%となつたところもある。大体約半数に減ずるといふ成果があがつている。この対策としても徹底的なものではなく、DDTの撒布と灌漑をして溜水を少なくすること位の程度とされる。都市にマラリヤの少いのはフランス時代の都市計画により、浄水設備と下水設備の完備していることが、大きな原因をなしているのであり、地方からの流入も充分考えられるので、恒常的な施策もとられる必要がある。

アメーバ赤痢も全国的に拡がっているとされている。衛生省の伝染病統計と国立病院の入院患者の統計では昭和30年に7,130とされているが、実際の発件数はこれに何倍かしなければならぬことはいうまでもない。このアメーバ赤痢は普通のものとは異なり、ランブリヤ・トルコモーナで、熱は出ないがアメーバ赤痢に似た症状を呈するとのことである。

ベストも前述の統計によれば、12名の発生をみたとされており、サイゴン・ブノンベンの中に病源地があつて、毎年若干発生するが、パスツール研究所で予防接種等を行い、最近の大流行はみられないとのことである。

天然痘も前述の統計では485の発生をみており、年中あるが、これも最近強制接種を行つてゐる。

チブスの発生は前述の統計で182とされている。

コレラの大流行も最近にはなく、10年前及び2、3年前に若干あつたが、30年は殆んどないとされている。

結核は可成り多く、短命の原因もマラリヤと並んで結核が相当占めているとされている。

肝臓疾患が病院でも非常に多く、原因はよくわからないが、熱帯性気候とも関係があるかもしれない。

流行性肝炎もあり、ウイルスによる伝染性のものとされている。

以上が大体疾病発生の概況であるが、次に専門家でない私共が、乾季3ヶ月間の限定のもとに、各地を廻つて遭遇した2、3の事例についてみよう。

まずマラリヤであるが、ブノンベンでは街の中央近くのホテルに宿泊した関係上、殆んどその危険を感じることはなく過した。地方の州庁のある都市でも同様である。しかし僻地の部落に行くときさすがにこの発生は多いのであろう、ストントレンのチユロップ村で訪れた家では、老婆がマラリヤでふるえて困るからキニーネを持っていたらわけてくれという。又クラチエの山嶽地帯ムノを訪れた時も、最後に要求したのはキニーネであつた。これ等はキニーネを知っているだけにまだ良い方かもしれない。その他の地区では、カンボディア人の体格は良い上に、別に肝臓や脾臓も外見上は特に大きいようにも思えないので、マラリヤも割合少ないのではないかと思つたが、年に一度位の発熱では案外皆馴れてもいて平気であろうことも考えられる。帰日してからの専門家の話では、原虫を持っていても外見上はよくわからないであろうし、特に原地民は相当抵抗力を持っていることも考えねばならないとのことであり、概況に示

されている如く、マラリヤは相当多いことが推察出来る。私共は3ヶ月の間蚊に刺されることは随分多かつたが、キニーネを服用していた為か、幸にマラリヤに冒されることはなかつた。

アメーバ赤痢には注意して浄水器を用いて生水を絶対飲まないこととしていたので、その脅威も余り感じなかつた。しかし現地の氷水等を飲んだ後等に発熱はしないが急激な下痢におそわれることが、2,3回はあつた。その場合携行のクロロマイセチンとエマホルムを服用して、大体2,3日では元に服することが出来たので、或はアメーバ赤痢の類であるかも知れないと思つたこともある。

眼病はトラホームが多いとされているが、コンポントムの手前で実にひどい眼病の部落に行つたことがある。糞や種子の蒐集の為に自動車をとめたところ、集つてくる男女子供が皆眼を真赤にしていて、子供の一人は睨を紫色に腫らしている。おそらく部落全員が眼病に冒つてゐることは間違いない。この中の1人に持つていた目薬をさしてやると、我も我もとやつてくる。遂にたまりかねてオスバン液をやることにして、水を汲んでくるように云うと、汚い水を汚い瓶に汲んでくるが、仕方なく滴下してやると、消毒もしない手をその中に突込んで、子供の眼にごしごしこすりつけ、その後で又自分の眼につけたりしている。その様な状態なので凡そ眼病の知識は勿論、衛生観念などありそうに思えない。恐れをなして早々に引上げることにした。近くに赤十字のマークのある小屋があつたので、時には看護人でも来るのであろうが、その機能を發揮していないのか、或は長期に亘る治療を続けることが出来ないのか、とにかくひどいものであつた。部落内に一人でもその様な眼病が発生すれば、忽ち部落全体にこれが伝染してゆくところに大きな問題があり、衛生知識の普及が特に必要であることを痛感した。恐らくこの眼病は他の地区でも多いであろうことが想像される。

レブラに対する私共の知識は殆んどないが、シュムレアップ近くの部落で、一見して弱々しそうな全身青白い10才位の子供を屋内にみて、そうではないかと思つていそいで立退いたことはある。カンボディアには特殊施設として癲病院がある。

皮膚病のひどいにはシソフォンからバツタンバンに行く途中の部落で出会つたことがある。子供であるが全身が皮膚病に冒されて痒ゆがつていて、何とかならないかという。他の子供達も多少は冒されている。これも眼病と同じく一人が冒されると大概の子供に移るらしい。その他黒い肌に赤白い斑点のある者は非常に多いが、これも皮膚病の痕跡ではないかと思われる。

カンボディアで良くみかけるのは、顎の下を大きく腫らした。甲状腺でも肥大した様な瘤をつけた男女であり、各地でその様な者に出会つた。手足の萎縮した畸形もブノンペンでみたことがあるが、そう多くはなさそうである。

肝臓疾患も多いのではないかと思われる。私共の滞在中に亡くなられた日本の方も、当初は黄疽ということで食欲がなく衰弱して、マラリヤも併発して最後には膀胱結石になられたと聞く。カンボディアでは医薬分業なので、最後の日が日曜日にあたり、薬剤入手に非常に苦労されたらしい。私自身の経験でもブノンペン出発10日前に約40度の熱が2日続いて平熱となり、その後には又2日高熱が続いて平熱となり、3,4日後には黄色くなつて黄疽の症状を呈して、その後の恢復に約2ヶ月を要した。巴黎大学医博の中国人医師の往診を依頼して、初日は注射のみ、2日目は注射してクロロマイセチンを服用するよとのことであり、4日目再び高熱になつた時にマラリヤとチブスの疑いがあるから血液検査をするよとのこと、その機関に紹介して貰つた。ヴィエトナム系の検査官が来てその日のうちにマラリヤの疑はとれた。翌日チブスでもないらしいことが判明、なおはつきりするの翌日の日曜と月曜の憲法発布記念日の休日を終えた3日後とのこと、全く食事の制限を受け、その後にはじめてチブスでもないことがわかる。在留邦人の方は恐らくデングだろうとのことであつたが、結局正確にはわからな

つた。ブノンベンと香港間の輸送に当る船員でも、一度位はその様な症状を呈するとのことであり、高齢者よりも青年層に多いとのことである。

医療施設や医者数は極めて少く（野中時雄前提論文参照）、1952年でもベット数2,856、各種医師43人（アジア政治経済年鑑）であり、診察料や医薬品は極めて高い。医者の往診には最新式の自動車を運転してくるが、その1回の往診料が400リエール（約4,000円）であり、血液検査料でも240リエール（約2,400円）である。日本商社の方が盲腸炎となられた時は、手術料も1週間余の入院費も含めて16,000リエール（約16万円）の経費を要したと聞く。その場合医者の不在で、3日はペニシリンでおさえ、その後手術したのであり、当初はバンコックまで飛行機で行き、信用ある医師に手術を依頼しようという計画までされたそうである。このように医療費も高価なので、例えば普通の官吏や巡査の月給でも3,000リエール下級兵隊2,000リエール位に過ぎない、まして一般原住民で医者の診療を受けるものは極めて少いであろう。上層の極く一部か、外国人華僑等が利用するに過ぎないものと思われる。そこで街頭の木蔭で手廻しによる歯の治療が繁昌したり、中国人らしい街頭の薬草売りを多くみかけたりするのであり、地方の農村ではなお妖術者の祈禱に依る場合が多いときくが（私共は一度も遭遇しなかつた）、事実その様なことも多いであろうことが想像出来る。

産院は約15とされているが（東南アジア政治経済総覧）ブノンベンやバタンバン等の大きな都市にあつて、仲々賑つている。華僑或はヴィエトナム人の都市生活者が多く利用しているらしく、カンボディア人は殆んどみかけなかつた。バタンバンの一産院はヴィエトナム人の経営であつたが、その女主人はサイゴンで一年間見習をやつてようやく産婆になれたという。カンボディアでは3ヶ月で産婆になれるが技術が劣つていてだめだとも云つて、娘に日本の産婆の技術を習得させたい意向でもあつた。機械設備類も揃えていて、日本の産婆とも異なる。農村では出産に関するいろいろの慣習があるが（カンボディア民俗誌）直接みることは出来なかつた。やはり産婆が立会うとのことである。

地方の小さな街にも赤十字のマークをつけた2、3坪の診療所が設けてあるところもある。ここではヨードチンキやホータイ等が用意してあつて、急患の応急処置は出来る。プレクロン（Prek Ron）に行つた時その診療所の主であるカンボディア人は、常住地はカンボットであり、月に3回位このプレクロンに来るとのことであり、一諸に居た婦人は看護婦であり、やはり多いのは出産であるとのことであつた。

環境衛生も勿論遅れている。都市にはフランス式の都市計画による浄水水道設備や下水道も完備しているが、地方に行けば、飲料水は小川の流れでもあればその水を使用し、川のない所は井戸を掘つてこの水を使用する。井戸もカンボディアの各地でみることが出来たが、2、3米から7、8米位の深いものがある。はね釣瓶を使用したり、バケツを麻縄でひきあげたりしている。個人用のものより共同のものが多い。木框や石框をつけたりしているところもあるが、掘つたままのものもあり、濁つた水もあれば、割合きれいな水もある。この井戸もない所では、土堤をこしらえてこれに水を貯めて、濁つた水を飲料としているところもある。雨季には更に水が濁ることも考えられるが、原住民は濁り水でも意に介していないように思える。生水も平気で飲んでる。

便所の方は都市のホテル等では水洗式の立派なものを使用しているが、地方に行けば立派なお寺でも満足なものはない。カンボディア人の農家では便所はみあたらない。大便なら土を掘つてやれという。華僑は家の後方に仮小屋を建てて便所をつくつているが、板を渡しただけで下が全部みえるもので、時にはこれが溢れていて蠅がくつついている。勿論その様な飲食店には蠅が多い。都市の市場等では衛生官らしい者が見廻つたりしていることもあつた。

水浴はよくやるらしく、流れのあるところはそこで、井戸水のあるところはその側で、或は人工の土堤の水につかつて、殆んど毎日マンデーをやるらしい。子供等が泥水の中に入つて遊んでいるのも度々みかけたが、ともかく乾季であり、太陽光線も強烈であるためか、それ程の不潔も感ぜず3ヶ月を過した。

一般には勿論疾病に対する知識も、環境衛生に対する知識衛生に対する知識も乏しいことはわかる。しかしながら衛生省も外国の援助を受けて、衛生に関する野外映画を実施し、衛生省管轄の医学コースを設け、或は地方の小さな街に診療所を設置して、衛生に関する知識の向上と実際の治療も施しつつあるので、今後の成果は期待されるであろう。(高山記)

治安状況について

カンボディアの政情や治安関係については、既に多少の報告もあり、東南アジア政治経済総覧等にも詳しいので、多くは触れないことにして、現地の視察状況を簡単にみよう。

カンボディアでは既に戦前から微弱ながら反仏の民族運動も行われていたが、表面化することは少く、第二次大戦中には日本軍の支持によりシアヌーク王を主権者として、日本に亡命していたソン・ゴック・タンが帰政権を担当していた。これが日本敗戦のためフランス軍の圧力によつて政権を放棄せざるを得なくなり、逮捕される事件までおきて、親仏政権に支持が与えられることとなつた。この時機には多くの民心にも不安を与えたのであり、事実日本軍に協力しただけの理由によつて、下層のカンボディア人まで逮捕されたり、中には殺されたものも幾人かあるという。逮捕を逃れる為に山中に1年間住んでいたという者にも出会つたことがある。1947年には立憲君主国としての憲法が公布され、49年には仏連合内の独立という軍事・司法・経済面の多くの制限をうけた独立は承認されることとなつた。しかしこの制限独立に対する不満はシアヌークにも集り、終戦以来フランス復帰に反対して武器をとり、屢々仏軍の圧迫を受けていた、ソン・ゴック・ミンを主席とする急進民主主義者の自由カンボディアの一派は、ゲリラ活動から再び団結して完全独立を目標に武力斗争を開始した。これが北ヴィエトナム・ラオスとも連携を持つ共産系の独立運動であり、又一方反逆罪で逮捕されていたソン・ゴック・タンも民衆の運動により51年には釈放されて、完全独立共和制樹立を目標に運動を開始した。何れにしても完全独立を獲得することが目標であり、52年にはシアヌーク自ら平和的クーデターを実行して独裁的立場を確保するとともに、フランス政府とも度々交渉して、一時はタイ国に亡命するという事態も生じたが、結局53年8月には司法権と警察権を、10月には軍事権も委譲されることになり、完全独立への一歩をふみ出すこととなつた。そうして54年に調印されたジュネーブ協定に基き一切の武力斗争が停止されて武装解除されることになり、一応の治安の恢復平和を招来することとなつた。ジュネーブ協定に到達するまでは治安は大いに乱れ、民心は動盪していたであろうが、その様な時期に日本大使館も設置されたのであり、ヴィエトナムの義勇軍もクラチエ北方までも迫つて来て、大使館さえもバンコックに撤去せねばならぬという緊迫した時もあつたそうである。邦人の方もプノンベン市内ですら、テロ行為等も多くて治安が乱れ、身の危険を感じたことも多かつたとのことであり、地方では更に危険であつたことはいふまでもない。

しかしジュネーブ協定以後はソン・ゴック・タンも10月にシエムレアップで投降し、ヴィエトナム軍も10月中に撤退することになり武力抗争は終つて、かわりにアメリカの援助も急速に活発となり、プノンベンも高層建築が立ち並び住宅も建築されて、自動車もアメリカ製のものが目立ちはじめて、見違える程に復興されてきたのだそうである。

その後総選挙ではシアヌークの率いる人民社会党が圧倒的な勝利を収め、政府の交迭は屢々

繰返されるが、依然としてその系統により議会及び政権が維持されている。しかしながらこの政党や政府に反対するソン・ゴック・タンの率いる民主党や、ソン・ゴック・ミンの一派もあり、現政権に不満を持ちこれに対立する隠然たる潮流のあることも無視出来ない。

ともあれ私共の滞在3ヵ月の間には、何等の暴動もなく、緊迫した事態も生じたこともなく、平穩無事な旅行を終えることが出来た。しかし曾つての内戦の際に爆破されたという橋梁の残骸や、監視哨の建物等は各地にみかけることが出来たのであり、如何に内戦による大きな犠牲を支払ったかを窺うことは出来た。現在でも各州の州庁のある都市の街はずれには、必ず兵営があり（旅団）不意の事態に備えている。そしてクラチエ・ストントレン等のような北方の州では、旅団の外に国境近くに前哨線を持っていて、駐屯部隊が待機している。その外橋梁の袂等にも警備兵が配置されている。しかし妻帯者等は一緒に住んでいて、平和にも馴れて極めて呑気そうに見える。一般住民も至極平和な生活をしている。そうはいうものの、滞在中にも外務省からの通達として、自由カンボディア軍の逃げ込んだといわれるシュムレアップ北縁の地方は、完全な治安が保たれていないから注意するようにとのことでもあり、今でも多少の不穏な地域の残されていることも事実であろう。幹線道路からそれ程離れなかつた為か、シュムレアップ地区を通過した時も別に危険を感じることもなく、住民も平和に大きな池では海水浴と同様な風景もみられたし、農村の祭も賑やかに行つていた。或る小さな部落で一泊した時などは、自由カンボディア支持という青年にも会つたが、彼は曾つては4ヵ月も投獄されたこともあると云つたが、現政権には勿論反対であり、一般大衆の生活向上等にも強い関心を持つて、新しいカンボディア建設にも烈々たる情熱の持主であり、私共にも一泊の宿を提供してくれた、極めて好感の持てる青年であつた。ともかく私共に対しては、一般大衆は勿論下級官吏や軍人は極めて親切であり、何処でも「ニッポン」というだけで好意的に又親愛感を持つて接してくれた。これはカンボディア人だけではなく、地方小都市や小さな街における華僑でも、同文の誼で親近感を持ち随分協力してくれて、共に食事をしたこと等も度々であつた。一般大衆からは戦時中の反日感情等は皆無と云つてよく、親日感情だけを強く印象づけられた。

カンボディアは現在インド・ビルマの如き中立政策を標榜して、自由諸国の経済援助も受けるし、共産諸国の経済技術援助も受入れている。一時はその為自由陣営である南ヴィエトナム及びタイとも国境封鎖等の情勢硬化を来したこともあるが、現在では一応安定状態にある。軍事面に関してはフランス及びアメリカの援助によつて、その訓練装備等も進められている模様ではあるが、未だ SEATO にも加盟していない。何れにしても国内の治安は一応保たれているものと思われる。

一般社会の公安秩序の維持には勿論警察がこれに当つている。カンボディア人のうちでは普通の者は農民か都市労働者であり、教育を受けた優秀な者は官吏・僧侶・教師・将校及びこの警察官になつて手近な生活の安定と出世の道を歩んでいるように思われ、その他の生産的な事業等を営む者は極めて稀れであり、その様な道に進まないし、又進み得ない条件下にあることも大きな問題であろうが、ともかく一般大衆より優れた者が警察官として活躍して公安の維持に努めていて、一応の安寧は保たれている。しかし警察権を恢復してからの日も浅く、曾つては仏人は長く治外法権下にもあり、その様な慣習に馴らされていたためか、或は長い期間抑圧されていた民族特有の感情からか、外国人等に対しては極めて穏便であるに反して、カンボディア人に対しては極めて高圧的峻烈な取締りを行つているように思える。しかもこれが華僑やヴィエトナム人の取締り等に対しても、或程度の遠慮と寛大さを示している。その様な状況を目撃したこともあるが、むしろ華僑の方は平然としていて、一段上に立つて見下している感じを受ける。だがその様な場合だけではなく、外国人であろうと規則を楯に強引な処置を行う警察官

もあり、警察権の自由な行使と民族独立を誇として、秩序の維持に努めていることは充分窺える。

1951年の第一審裁判所取扱い件数をみると、民事事件数10,838件、違警罪事件数1,119件、この中では侮辱211件、及び衛生・警察法規違反145件が多く、出生届出の拒否50件、乱暴22件、喧嘩18件等がつづいている。同じく軽罪事件数は4,837件であり、内訳は窃盗1,189件 傷害1,122件が多く、次いで詐欺326件、公務執行妨害、暴行298件、風俗関係軽犯罪147件、収穫破損113件、浮浪68件、名誉毀損59件等である。刑事裁判所取扱い事件数は1,027件であり、そのうち強盗637件、謀殺168件が群を抜き、誘拐・強姦18件、悪人たちによる結社結成16件、放火14件、尊属への暴行8件、強姦6件、殺人4件、公金横領4件、その他502件となっている（東南アジア政治経済総覧567頁）。

司法権が完全に行使出来るようになったのは、1953年以降であり、現在の事件数は51年当時とは内容も多少異なるであろうが、大凡の傾向は窺える。

司法権が確立されても未だ充分な人がいないので、或る日本商社と悪質中国人家主との紛争が起きた時など、裁判官及び警察官がカンボディア人であり、弁護士がフランス人、執達吏が印度人で国際色豊かな組合わせとなり、事が手早く法規通り順調には進まないことを知った。何処でも官憲との結びつきはあるらしく、このような場合には警察官にも全面的な信頼をおくことは出来ない。

一般農村などでは、未だ村長その他の権威者の仲裁によつて、大概の紛争は解決されるといわれるので、民事事件等で裁判所まで持ちこまれることは、そう多くないものと思われる。

何れにしても時の経過と共に、改革も行われて、近代的な司法権の行使も行われてゆくことであろう。(高山記)

附 2 ダルマワラー ベロン氏との会談記録

ベロン氏には紹介いただいたので一度は訪れる予定でいたが、これも偶然の機会に会うことが出来た。3月30日ユンバン氏が来て近くのお寺で映画があるからゆかないかとのことなので農村文化の一部にでも接し得ればと思ひ出かけた。寺の境内にスクリーンを張つて思い思いに腰を下したり腰かけたりして老幼男女が集つている。やはり若い青年や子供等が多い。屋台店も出張してきている。映画はスキー等のニュースやフランス映画をやつていた。この様な野外映画は各地で2、3ヶ所みかけたが、衛生関係の色彩映画等で弘報活動と思われるものもある。ともかくここに来ておられたベロン氏に最初にお会いしたのである。氏は印度に長く亡命されていた独立の志士情熱家であり、アメリカその他各地を廻られ日本にも2回来られた非常な親日家で而もカンボディアの有力者である。諸君等の来るのを待つていたんだとも云われて、明日11時にデイナーに来る様にとのことであつた。

翌日早速ワットプラに氏を訪れる。儀礼的な挨拶の後、食卓に並べられた10種類位のカンボディアの料理をすすめてくれる。僧職にある身は俗人と一諸に食事をしないということで氏は既に終えておられる。勿論午後は一切食事を摂られない。

ベロン氏 実はあなた方の来られるのをいつかいつかと待つていたのだが、今日はよくきてくれました。プレクリップ試験場の場長ホートンベンにもあなた方の訪れたことを聞いていたので、何処へ行つたか探していたのだが、一体今までに何処へ行きましたか。

佐藤 私共もお会いしたいとは思つていましたが、一諸に行つてあげようとおつしやるかの都合でのびのびになつてしまい、失礼してしまいました。今までに私共の行きましたのは、ブノンベン周辺の農業地帯と、コンボンスプー、キリロムそれとクラチエ、ストントレンの最

北の州の調査に行つて参りました。

ベロン氏 あなたがたがみてカンボディアの農業をどう思いますか。

佐藤 まだ少ししか廻つていませんので何とも申し上げられませんが、カンボディアにはまだまだ広い土地が利用されずに残されているように思います。そして卒直に申し上げますと、カンボディア人は一寸怠けていて、お米ばかり作るだけでこの残された土地を利用しようというひとがいないのではないでせうか。

ベロン氏 確かに未開拓の土地が残されていることは事実だ。

佐藤 それに農業技術が非常に遅れているように思う。例えば栽培方法にしても、施肥もしなければ、薬剤撒布も行わない。植栽方法にしても極めて粗雑で幼稚である。私は戦時中インドネシアの各地の農業をみるのが出来たが、あの地方と較べても非常に劣つているように思う。そしてあの地方では経済作物も随分とり入れているが、カンボディアではコンボンチヤムのゴム園以外には何も無い。少くとも曾つて栽培されたことがあるのなら、この残りでも何処かで見かける筈なのに、不幸にしてまだその様なものをみたことがない。ということは未だ試みられたこともないのではないかと思われる。

ベロン氏 私も曾つてセイロンやジャワに行つたときにみてその様な栽培状況は知つている。カンボディアに於ては全然ないとは云われぬが、極めて僅かであることは事実だ。ところでエコノミックプラントではどの様なものが有望と考えますか。

佐藤 それは一概に何が良いかと云う断定は今の所出来ない。気象条件土壤条件に適合した最も良い作物が選ばれるべきであり、何とも云えないが、しかし一般的に云つて、オイルパーム・カカオ・コーヒー・ココヤシ等は栽培出来るのではないかと思う。今までに見たココヤシは一寸生育が悪いように思うが、これは栽培方法も悪いからである。

ベロン氏 それではそのようなエコノミツリプラントを栽培することの出来る所はどの地方が良さそうであるか。土壤は何処が肥えていると思うか。

佐藤 今までみたところでは、コンボンズプーから行つたキリロム山麓のジャングル地帯、ここはレアムに行く道路も出来つつあるので、距離的にも有利なのではないかと思う。今土壤等を採集してきているので、この良否は日本に帰つて分析すればわかるが今のところははつきりお答え出来ない。しかしあれ程樹木が繁つているので土壤の良いことだけは想像出来る。それとストントレン周辺のジャングル地帯も良さそうに思える。その他の地区も土壤を集めてきているが、この結果は日本に帰つて報告出来るものと思う。

ベロン氏 良くわかりました。土壤の方は是非ともお願いします。

佐藤 それから今後の開発方式は、曾つてのゴム園のようなプランテーションシステムではいけないと思う。プランテーションではカンボディア人は労働者として搾取を受けるだけで、利益は皆外国人に持つてゆかれてしまう。それで今後はコウオベレイティブな皆の協力による開発方式をとる必要があるのではないかと思う。

ベロン氏 全くその通り。ところで日本は土地が狭く人口が多い。反対にカンボディアは人口は少いが土地は広い。それで開発の余地は沢山残されている。しかるに日本人は何故カンボディアに来たがらないのか。(移民受入れに対する日本の回答ははつきりしないことに対する疑問であるらしい。この様な移民或はキリロムその他の経済協力に対しては、プノンベン放送局から度々宣伝していただき、多くのカンボディア人がこれを知つており、何時日本が来るのか、来たら一緒に働きたいという市民にも度々出会つた。が私共は移民その他政治的な発言は全然さしひかえることにしていたので返答に困る)

佐藤 そのことに関しては私共は何とも申し上げられぬが、カンボディアが日本に較べて

暑いということも一因ではないかと思う。

ベロン氏 カンボディアは決してそう暑くはない。ハワイにしてもロスアンゼルスにしてももつと暑い。それなのに日本人も多く行っているではないか。

佐藤 それはそうだ。私共もカンボディアがそう暑いとは思っていない。しかし移民その他に関しては当局者のいろんな事情もあることであり、その為の調査団も来て目下検討中でもあるのであろう。私共は一応その様なことは別個に基礎的な学術研究に来ているのであり、これ等が日本に帰つてからの資料提供には充分なと思うから、出来るだけ資料を蒐集して帰るつもりである。それで日カ両国の親善は私共も大いに尽したいと思うが、政策的なことに関しては私共にはお答出来ない。

ベロン氏 大いにカンボディアの実情をみて御協力願いたい。私に出来ることがあつたら何でも便宜をおはからいます。

高山 カンボディアの地方を少し廻つて感じたことは、カンボディア人は農村に住んでいて非常に貧しい生活をしているように思う。それに対して都市には華僑や外国人が住んでいて裕福な生活をしているように思える。これは華商などに流通機構を支配されていることも大きな原因と考える。それでこの対策も必要ではないか。そしてカンボディア農民の生活水準を上げること大いに問題とされねばならないのではないか。

ベロン氏 そのことも充分承知している。

高山 それともう一つ。農民の教育が充分行われていないのではないか。教育は地味ではあるが、最も重要なものと思う。特に科学的な教育に重点がおかれなければならないと思うが。

ベロン氏 それは必要である。現に私のところでも校舎の増築等を行いつつある。

高山 その為にも諸外国日本等へも留学生をどしどし出すようなことも考えられてはいかがですか。とにかく新しい建設をやつてゆく中堅人物の養成が必要だと思う。先進諸外国の現状をみるだけでも充分たためになることと思う。

佐藤 カンボディアの留学生だけではないが、日本に来ている外国の留学生は、必ずしも本当に勉強しているひとばかりではないように思われる。金持の子弟や特権階層の子弟ばかりではなく、本当に有能なカンボディアの役に立つ熱意のあるひとを送る必要がある。特に新しい技術の習得をして、これを役立てることの出来る様なひとが最も必要だ。

ベロン氏 その様なことも必要にならう。

佐藤 広い土地があつても、これを充分利用出来る様な人がカンボディアにはいないのではないだろうか。誰もこれを試みようとしないう様に思える。

ベロン氏 私が試みよう。そしてその時は佐藤教授も一諸に協力して貰えるか。

佐藤 今は勿論公的な身であるので直接的な御協力は出来ないがさしつかえないかぎり、御援助は致しませう。

.....

グランラック一周の調査に出かけることを述べておいたましようとしたら、紹介状を書くから明後日来るよにとのことであつた。感謝しながら辞す。一諸にいた市議は盛んに日本軍が来てフランスからカンボディアの独立を助けてくれたと喜んでた（この様な考え方のカンボディア人も多い）が、ベロン氏は一瞥をくれただけであつた。その後も調査報告と挨拶に一回お会いしたが、私共の調査にも非常な協力と好意を寄せられて、一諸にカンボット方面の調査にも出かけようとも思つておられたことを後になつて知つた。記して感謝の微意を表したい。

(高山記)